

青山学院大学ボランティア・ステーション

2013 年度活動報告書

<目次>

学長挨拶	2
代表顧問挨拶	3
2013 年度学生代表挨拶	4
夏期プロジェクト活動地域地図	6
学位授与式・入学式 学内記念撮影ボランティア	11
キッズウィークエンド・福島子ども保養ツアーボランティア	13
渋谷区大清掃作戦	15
多賀城プロジェクト	17
塩釜市教育・福祉プロジェクト(浦戸合宿・小中学校・福祉支援)	20
塩竈市経済復興支援活動	32
塩竈市 WEB 広報活動	39
AOYAMA GREEN FESTIVAL ～同窓祭～	42
地域部「えびす青年教室」・知的障害者幡ヶ谷教室「GAYA」ボランティア ..	44
国際部 フィリピンプロジェクト	47
世界食糧デー	54
伊豆大島台風 26 号災害ボランティア	56
2013 年度青山祭 ～出店～	58
2013 年度青山祭 ～教室展示～	60
フィリピン台風救援金	62
卒業学年報告～ボランティア・ステーションでの活動を通して～	64
編集後記	76
アルバム～写真で振り返る 2013 年度の活動	77

学長挨拶

ご挨拶

学長 仙波 憲一

はじめに、東日本大震災ならびに本年の伊豆大島の台風、フィリピンの台風で被災された方々に心からお見舞い申し上げます。

2011 年 3 月 11 日 わが国は東日本大震災を経験し、東北地方を中心に沢山の地域が被災し、多くの尊い人命が失われました。本学では、震災直後、学生のなかから、「わたしたちにも、何かできることがあるのではないだろうか。」との声があがりました。「ボランティア・ステーション」を組織するとともに、学長を委員長とする緊急支援対策委員会を設置し、ボランティア・ステーションを通じて教職員と学生の連携により、被災地に対して様々な救援物資の提供や各種ボランティア活動を行ってきました。

結成から 3 年目となる本年度も塩竈市をはじめとした東北地域支援、渋谷区をはじめとした地域社会貢献、グローバルな視野でのフィリピンでの国際協力活動等が行われました。これらの活動は、まさに、スクール・モットー「地の塩、世の光」の精神が目指すものにほかなりません。主体的にボランティアに企画・参加する学生に対し、敬意を表するとともに、本学学生を受け入れてくださりお力添えいただいた現地の方々、あたたかいご支援をいただいた皆様ならびに関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

引き続き、本学は教育研究の充実とボランティア活動等の活性化を通じて、「人と痛みを分かち合い、人種、性別、国籍、宗教を問わずに積極的に助け合いの行動を起こす“青山らしい人材”」を育成することを使命と考え、ボランティア活動の支援に力を入れて参ります。被災地の方々や学校周辺をはじめとする様々な地域コミュニティの方々と手を携え、更に発展させた社会貢献活動につながることを期待しております。

代表顧問挨拶

忘れない

ボランティア・ステーション顧問

平澤典男

テレビの映像で見た 3.11 の光景はあまりにも厳しいものでした。自然の猛威の前に私たちはひとりではあまりに無力であることを知り、その後の政府の救援活動の遅れにいらだちと疑問を持ちました。しかし、その隙間にボランティアを通してひととひとが直接つながること、直接行動することの価値に気づいたのではないのでしょうか。震災と同時に記念館に 9000 人の帰宅困難者を受け入れる体制が作られたこと、直後に学生たちが立ち上がりボランティア・ステーションがつくられたことは「地の塩、世の光」をスクール・モットーとする本学の本質が表現されたものと感じています。

あとひと月あまりで 3 年の月日が過ぎたことになります。いまではテレビで震災の光景を見ることもほとんどなくなりました。瓦礫処理が進み、街並みは徐々に元に戻っているのかもしれませんが、震災の傷跡はそうした風景で測られるものだけではありません。1 万 5 千人近くが死亡し、6 千人あまりが負傷、2 千数百名がいまだに行方不明であるという事実は、残された家族、親類、知人にどれだけの悲しみ、絶望、空しさをもたらしたか、想像を絶するとはまさにこういうことを言うのでしょうか。しかし、私たちはあえて想像してみることも必要ではないのでしょうか。被災地のひとりの被災者を想像してみましょう。彼は震災で死を迎えたかと想像してみましょう。また彼の死因を想像してみましょう。水死、圧死、焼死、……。どのような水死だったかを想像してみましょう。瞬間的に亡くなったのでしょうか。それとも凍るような水の中で身動きができず、徐々に死を迎えたのでしょうか。彼に子供がいたとしましょう。薄れゆく意識の中でその子に何と言いたかったのでしょうか。彼の奥さんは助かっていたとして、彼女の悲しみを涙を浮かべずに想像できるのでしょうか。死亡した 1 万 5 千人それぞれの周りにこうしたあまりにも悲しい物語が数多くあったはずです。私たちがボランティアといって、東北地方を訪れる時、できればこうした想像をめぐらしてから訪れるべきだと思います。そのとき、はじめてボランティアの自発性、自主性、無償性、利他性が自然なかたちで生み出されると考えます。被災したかたがたにはその辛さを忘れてもらいたいと思います。東京のわれわれはその辛さに思いをめぐらした心を忘れてはなりません。

3 年の月日はボランティア・ステーションのスタッフの入れ替わりをもたらします。ボラステ第一世代は、震災体験がその活動のモチベーションでした。これからの第二世代はこれまでの活動をどう繋げていくかという、より困難な課題を持って前進しなければなりません。2 月 6 日、本学と塩竈市の間で連携協定が締結されました。2012 年、2013 年の支援活動で徐々に信頼を高めてきた塩釜市とボラステがもう少し腰を据えて被災地支援活動をする枠組みができたわけです。塩釜の地元では青学ボラステの T シャツのブルーが復興支援の色に見えろと言います。期待されているなら応えようではありませんか。

2013 年度学生代表挨拶

2012～2013 年度 学生代表

経営学部 4 年

瀬川 達也

青山学院大学ボランティア・ステーション（以下 AGU-VS）の学生代表の瀬川達也です。AGU-VS の発足から早いことで 3 年が経とうとしております。これは、すなわち弊団体発足当時から“東北復興”を目的に活動を行ってきて、3 年が経とうとしているということです。これまでの 3 年間の中で、学生である私たちに何ができたのだろうかと問うてみても、その答えは簡単には見つけられません。夏期休暇中の活動を中心に毎年、東北での活動を行う度に新しい課題が見え、それを乗り越えるために、ただただ、必死になって活動に専念する日々を過ごしてきたかのように思います。今では、震災がすっかり過去のものとして風化してしまい、ボランティアの数が圧倒的に少なくなってきたと言われていると言われております。震災当時、高校生だった学生が東北ボランティアに関わるように、その多くが東北＝瓦礫の山という風に考えております。しかし現実には瓦礫の多くはすでに撤去され、跡地には雑草が生い茂っていたり、新たな建物が建設されていたりしています。そうしたギャップのせいもあってか、東北は復興した。と感じてしまう学生が多く居てしまうのは、ある意味で仕方のないことであると私自身もそう思っています。しかし、今では滅多にマスメディアを通じて報道されることのない東北の日常は、私たちの考えているものよりもっと深刻な問題です。街の復興、子どもたちの教育問題、人々の職と生活など挙げればきりがありません。

これから先、私たちが活動を続けていくにあたって一番大切にしていかなければいけないのが、“目的意識”とこれまでの“経緯”であると感じています。学生団体という性質上、毎年人が入れ替わり、震災当時大学 1 年生であった私たちも大学を卒業し、それと同時に団体からも引退することになります。1 年で人が入れ替わってしまうことに、ボランティア先で関わる方々も混乱してしまうことがあります。そうした中で、やはり団体として一つの目標に向かい全員が同じ夢を描いて、熱意を持って活動に取り組んでいくことが何よりも大切なのではないかと思います。

幸福なことに、当初 40 名ほどであった AGU-VS の学生スタッフが 2013 年度には 100 名を越えました。活動範囲も東北に留まらず、地域、海外にまで展開しております。団体として国内外問わず、多くの活動を行える環境が青山学院大学には備わっておりました。そして、しっかりと明確な意志をもった青山学院の学生と共に大学の 3 年間でボランティア活動に費やせたことは今となっては私にとってかけがえのない財産となっています。しかし、冒頭にも述べたように、私たちの活動の成果というものは決して簡単に測れるものではありません。成果が出ているかどうかはまだ正直なところ不安があります。しかし、間違いなくこれだけは言えると思います。それは、ボランティアを通してたくさんのきっかけを生み出し

てきたことです。そのきっかけとなる“種（希望）”を蒔いてきたのがこの3年間であったように思います。私がボランティア活動に関わる際によく言われたのが、『ボランティアは一過性のものであってはいけない』ということでした。継続的に続けてこそ、初めて見えてくるものがあると思います。だからこそ、これからのAGU-VSでは、これまでの3年間で蒔いた多くの“種（希望）”を育て、それが芽を出し、茎を伸ばし、花が咲くころまで、継続的に活動に取り組んでいくことと思います。その過程でまた新しい“希望”を生み出すことも大きく期待をしていきたいと思っています。

こうして3年間に渡って、活動を行わせて頂いてきた中で、大変多くの方々がAGU-VSに手を差し伸べてくださりました。末筆ではございますが、そうしたこれまでの全ての方々の支援と出会いに感謝して、御礼の言葉を述べさせていただきます。誠に感謝しております。ありがとうございました。

そして、これからのAGU-VSにも私自身多くの期待を寄せ、皆様方にも今後とも変わらないご支援を頂けますと幸いです。どうぞよろしくお願い致します。

3smiles”青学、日本、世界を笑顔に”！！

夏期プロジェクト活動地域地図

【東北部 宮城県】



- ① 宮城県塩竈市：仙台市と日本三景で知られる松島との中間に位置し、港町として栄えてきた。また浦戸諸島には、菜の花や海水浴など海や島を楽しむために多くの人を訪れる。
- ② 宮城県多賀城市：市内には多賀城跡をはじめとした史跡が点在しており、南部の平野には工業地帯が形成されている。

【地域部 東京都渋谷区周辺】



- ① 知的障害者幡ヶ谷教室 GAYA(幡ヶ谷社会教育館)
- ② 渋谷区 清掃活動



③ えびす青年教室 恵比寿 2-27-18 恵比寿社会教育館

【国際部 フィリピン・シキホール島】



【フィリピン・レイテ島】



フィリピン台風支援募金活動 (青山キャンパスにて募金活動)

学位授与式・入学式 学内記念撮影ボランティア

法学部法学科 3 年 河合彩夏

【活動場所】

青山キャンパス

【活動日】

学位授与式：2013 年 3 月 23 日

入学式：2013 年 4 月 1 日

【活動目的】

学位授与式や入学式において、円滑に写真撮影を行うことで式典参加者にとって良い記念となるようにする。

【活動内容】

学内での写真撮影の補助活動。撮影の手伝い及び待機列の整備・誘導。

【所感】

学位授与式や入学式では、“青山学院”の表札のある正門前で記念撮影をされる方が多い。しかし、正門を一步出ると、一般の方々も通る公道である。通行の迷惑にならないように、そして、学位授与式及び入学式という晴れ舞台を無事に迎えていただけるように、青山学院大学ボランティア・ステーション(以下 AGU-VS)でお手伝いをした。

正門付近では写真撮影を希望する卒業生、新入生の方々のカメラを預かり、一組ずつ撮影を行っていった。また、写真撮影希望の方々の列が長蛇に及んだため、混雑の緩和のために列の整理等も行った。その他正門以外にも、間島記念館、ガウチャー前等のキャンパス内にて写真撮影をしている方々に積極的に声をかけて撮影のお手伝いをすることで、一人でも多くの方に“青山学院大学での思い出”を持ち帰ってもらえるように活動した。

学位授与式・入学式ともにとても良い天気で、朝早くからたくさんの方々が記念写真を撮っていた。“青山学院”の表札前での写真撮影をするために、正門前の列では 1 時間近く並んでくださる方もいた。私達は、それだけ長時間待つて下さる方々の記念に残るような素敵な 1 枚を撮影してあげることができるよう様々な工夫をした。撮影待ちの長蛇の列が出来る中、一組ずつ撮影の希望を聞きつつ、出来るだけ余裕をもって撮影するために、それ以外での移動や荷物の受け渡し等をなるべくスムーズに出来るような動き方を考えたり、スタッフ同士で声を掛け合ったりして動くことを心がけた。両日とも、より効率よく撮影を行う方法を模索しながらの活動となった。

学位授与式・入学式ともに、どちらも朝から夕方まで引切り無しに撮影をし、たくさんの笑顔を写真に収めることが出来た。学位授与式では先輩方の艶やかな袴姿に、入学式では新入生の緊張したスーツ姿によって、キャンパス内は華やかな空気に包まれており、撮影をしていた私達 AGU-VS スタッフも自然と笑顔になっていた。このような私達の活動によって、大勢の方々の特別な日の思い出づくりに少しでも貢献できたのであれば嬉しく思う。

またこのような学内でのボランティア活動を通じて、青学生や保護者の方々にも AGU-VS の存在や活動を知ってもらえる機会にもなったのではないだろうか。

キッズウィークエンド・福島子ども保養ツアーボランティア

法学部 法学科 3年 河合 彩夏

【活動場所】

東京都立代々木公園

【活動実施日】

2013年 4月21日（日）

【活動目的】

放射線の影響が心配される福島県に住む子どもたちに、外で思いきり遊び、楽しんでもらうことで精神面での支援をする。

【活動内容】

代々木公園で行われた『アースデイ東京 2013』の中の一プログラム“キッズウィークエンド”にボランティアとして参加した。東日本大震災から2年経った今でも、福島では放射線の影響が心配されている。特に影響を受けやすいといわれている子どもたちは、ほこりやちりによる内部被爆も心配されており、外遊びなどを制限された状態が続いている。そのような状況下において、最近では子どもたちの体力や免疫力の低下がデータでも表されているほか、精神的な不安を抱えていること、興味関心といった生活意欲が低下していることなどが問題視されている。キッズウィークエンドは、そのような子どもたちを二泊三日で東京に招き、外で思いきり遊んでもらうことを目的として行われるバスツアーである。今年度は小学1年生から中学1年生の子どもたち約120名が参加した。

このツアーの最終日、子どもたちは代々木公園で行われている『アースデイ東京 2013』というイベントに参加した。青学生26名は、子どもたちの引率ボランティアである“ツアーリーダー”として参加した。子どもたち5~6人につき青学生2~3人で1つのグループをつくり、会場内に用意された様々な子ども向けのブースを回り、ワークショップなどに参加した。参加学生は子どもたちの希望を聞きながら場所を調べ、回る順番を考えるなど、子どもたちに楽しんでもらえるように引率をした。

【スタッフ所感】

大きな問題は発生せず、短い時間ではあったが一日を通して子どもたちと交流し、笑顔でお別れすることができた。放射線の心配がない環境で思いきり遊んでもらうことにより、様々な思いや不安、ストレスを抱えているであろう子どもたちの心のケアにもつながったのではないと思う。

被災地支援のなかでも瓦礫や土砂の除去など形として目に見えるようなボランティアが多い中、放射線の被害に苦しむ方々の心のケアのような、精神面の支援も継続していく必要であることを感じた。また、東京にいながらも私たち学生にできることがあるということも改めて感じた。今回が初めてのボランティア経験だったという青学生も多く、ボランティアに参加するきっかけづくりができたことや、参加したことで東北のことやボランティアについて興味を持つようになった青学生も多くいた。

渋谷区大清掃作戦

第一回：教育人間科学部 教育学科 1 年 駒木根 怜

第二回：法学部法学科 1 年 中島 由加里

【活動場所】

東京都渋谷区（大学～渋谷駅にかけて）

【活動日時】

第一回：2013 年 7 月 13 日（土）午前中

第二回：2013 年 7 月 13 日（土）午前中

【活動背景・目的】

渋谷区・ボランティア・ステーションスタッフ・青学生という 3 つの項目のために、活動が行われた。

まず、「渋谷区のために」であるが、私たちが通う大学のキャンパスがあり、日ごろお世話になっている渋谷区に感謝の気持ちを表したいという思いからだ。また私たちの清掃活動が、通行人の良心に訴え、ポイ捨てなどの行為を抑制できるようにしたい。そういった思いから企画した。

「ボランティア・ステーションのために」は、ボランティア・ステーションスタッフ内の交流を図るためだ。部にとらわれずに誰もが手軽に参加できる活動を、と言うモットーのもと、企画した。

青学生のために。これは学生一人一人に、私たちの大学のある渋谷区を知ってもらいたい。渋谷の街を、意識して見ることによって、今まで見えなかった新しい渋谷を発見し、渋谷をどんどん好きになってほしい。そういったことから企画した。

2014 年度にはこの「渋谷区大清掃作戦」を継続して行い、一般青学生にも参加してもらえるよう、地域部のスタッフが、運営側としての役割を把握し、実行できるようになることを目指した。

【活動内容】

はじめに、参加したスタッフを 3 つのグループに分け、各グループにそれぞれ、①渋谷駅新南口コース②宮益坂コース③代々木公園コースのいずれかのコースを割り振り、グループ別の清掃活動を行うというものだった。なお以上 3 つのコースは、地域部スタッフが予め調査へ行き、特にごみが目立った場所を必ず通るように設定した。また、ごみ拾いのコースの途中で、指定した場所で写真を撮る、フォトリレーというレクリエーション企画も盛り込んだ。

第二回では、清掃ルートに変更を加えた。以前の①駅新南口方面コース②宮益坂コース③代々木公園コースの3コース3グループ体制から、①宮益坂コース（二手にわかれてごみが多い地域を分担し、徹底して清掃する）②美竹公園沿いコース③クロスタワーコースの3コース、4グループ体制で行われた。なお、第一回に比べ、青学生が普段通学路として使う道を重点的に清掃した。

【スタッフ所感・展望】

今年度の地域部初めての新スタッフによる企画で、準備段階では不安があり、また活動当日になっても「これで大丈夫だろうか」とか「もしかしたら、どこか抜けている点があるのでは」といった具合に心憂くしていた。しかし実際に活動が始まると、そういった不安事はあまりなく、参加スタッフの協力もあって円滑に明るく進めることができた。

企画・活動に携わってなにより言いたいことは、「普段我々がいかに渋谷の街を見ていないか」ということだ。確かに私たちは毎日、渋谷の街、あるいは表参道の街を通学路としているために、渋谷、表参道の街のことを良く知っている“つもり”になっている。しかし実際に街を歩いてみると、更に言うとなんて普段の通学路の一本奥の道を歩いてみるだけで、そこにはいつもとは違う渋谷の姿がある。閑静な街中を歩いていても、たばこの吸い殻が散らばっているし、すぐそばにごみ箱があるにもかかわらず、飲み終わった後の缶を平気で路上に捨てる人がある。そして私たちはそういった問題に気づけていなかった。これでは「見て見ぬふりをしている」人たちと、私たちとは何ら変わらないではないか、ということを感じさせられた。それと同時に、普段お世話になっている渋谷の街に何もできていない自分たちがいるという事に悔しさを覚えた。だからこそ私はこの活動を継続的に、また活動の輪を広げて行っていきたいと思う。具体的には、2か月に一度などの高頻度で行ったり、同じ渋谷の街にキャンパスを構える大学のボランティアチームと連携したりしていきたい。

ゴミを拾うという行為自体は善である。しかし、だからこそ私はこの活動を継続的に行うことで、好き勝手にゴミを捨てるような人々に訴えかけ、前段階としてゴミを捨てないためにはどうすればよいのかということも同時に考えていきたい。

この渋谷区大清掃作戦が、学内だけではなく、より多く人に渋谷の街を好きになってもらえるような、大事にしてもらえるようなきっかけとなればいいと思った。

多賀城プロジェクト

法学部法学科 3 年 大城愛美

【期間】

8/5~11 日

【活動場所】

宮城県多賀城市立図書館

【参加人数】

6 人

【活動目的】

図書館を活性化させ、人がより多く集まる場所にするによって多賀城市立図書館を人と人とのコミュニティ形成の場にする。

【活動内容】

図書館内にて、多賀城市の小学生を対象としたイベント(読み聞かせ・実験イベント「シャボン玉作り」・モノづくり「万華鏡」・教育支援)の企画・運営を行った。

【活動行程表】

	午前	午後
1 日目 (8 月 5 日)	移動	移動・ミーティング
2 日目 (8 月 6 日)	図書館でのご挨拶	市内散策・活動準備
3 日目 (8 月 7 日)	絵本読み聞かせ	モノづくりイベント (万華鏡)
4 日目 (8 月 8 日)	絵本読み聞かせ	実験イベント(シャボン玉)
5 日目 (8 月 9 日)	絵本読み聞かせ	
6 日目 (8 月 10 日)	絵本読み聞かせ	
7 日目 (8 月 11 日)	絵本読み聞かせ	ご挨拶・移動

【活動内容詳細・所感】

活動初日は、活動が上手くいくかどうかという不安を抱えておりスタッフ・参加者ともに緊張していたが、学生同士が会話を重ね、活動の方向性を定めることで、活動への不安はなくなり活動への意欲を高めることができた。

活動 2 日目は図書館に訪れ、多賀城市立図書館の館長・副館長様に図書館内の説明や震災当時の多賀城と図書館の状況について詳しく説明していただいた。館内の案内では読み聞かせの児童スペースや視聴覚室、中庭などを案内して頂くことで、翌日に控えていた図書館での活動のイメージを膨らませることができた。震災当時のお話では実体験をお聞きすることで、震災がいかに恐ろしいものかということを再確認し、現在は震災の面影をほとんど残さない多賀城市の様子をビデオなどで振り返ることで、これまでの多賀城市を思い返すと同時に、初心を忘れてはいけないと感じた。翌日に控えた読み聞かせのイメージをさらに膨らませるためにボランティアで図書館に来ていた方の読み聞かせを実際に見させていただいたが、その方の読み聞かせは私達素人とは違い、聴衆を引き付ける読み聞かせで、その日のミーティングでは、その方のような読み聞かせができるようになることを目標に活動に挑もうと決意し、読み聞かせの練習を、子ども達の顔を浮かべながら行った。

図書館での活動初日は、想像していたよりも多くの子どもが参加してくれた。当初の予定では乳幼児向けの絵本と小学校低学年向けの本を交互に読むという予定であったが、図書館に来た方のほとんどが乳幼児だったため、乳幼児向けの本のみを読むことになった。乳幼児に向けての読み聞かせの練習をしていなかった学生は、ぶっつけ本番となりうまくいくか心配していたが、小学生向けのもので練習していたため、スムーズに読み進めることができた。これは練習していたからこそ急な対処ができたのであり、練習なくして成功はないと感じた。午後は万華鏡づくりを行った。子どもたちを3つのテーブルに分け、それぞれのテーブルに学生を配置し、直接作り方を教えられる形式をとったところ、子ども達ははしゃぎながらも真面目に万華鏡作りに取り組んでおり、分からないところがあれば気軽にテーブルにいるスタッフに聞くことで段取り良く活動できたため、形式としてはとてもよかったといえる。万華鏡を手作りすることによって、「どうしてこんなに不思議な仕組みが出来るのか」、「どこを工夫すればよりきれいな万華鏡になるのか」、「自分らしきを出すためにどのような装飾をするか」など、様々な視点から物事を考えることで、それぞれの子どもたちが万華鏡制作を楽しむことができたのではないかと思う。期待と不安を抱えながら活動した一日だったが、乳児が予想していたよりも多かったというハプニングにも対処でき、非常に順調に活動することができた。

活動が後半にさしかかるにつれて読み聞かせにも慣れ、実験イベントも万華鏡作りだけではなくシャボン玉作りも行い子どもと触れ合うことで、子ども達との接し方も段々とわかるようになり、スタッフの笑顔もたくさん見られるようになった。しかしそういった良い面だけではなく、悪い面も見えてきた。具体的には、「図書館での子ども達の行動にどの程度注意してよいのか」「シャボン玉づくりの際に液を吸い込んでしまう子が幾人かいたため、

詳細な注意点の説明をすべきであった」など多くの反省点がミーティングで挙げたが、話し合うことで改善していくことができた。

活動を続ける中で感じたことは、子どもが何人来るのかを把握できないのでプロジェクトの計画が崩れてしまうかもしれないということ、また教育支援は受動的(今回の場合だと、子ども達に私たちのところに来てもらって教育支援を行う)なものではなく、能動的(こちらから子どもが勉強している場に赴いて、教育支援を行う)という形でないと実施は厳しいものになってしまうのではないかという点である。そもそもボランティア自体がこちらから働きかけるものであり、積極的にこちらから行動しなければ活動は成り立たないことは明白で、根幹の部分忘れてはならないと実感した。

今回の活動内容は子どもを対象としているので教育支援的なものであるが、当プロジェクトの本来の目的は多賀城市立図書館を地域のコミュニティの場にすることが目的であるので、その部分を忘れずに子ども達のことだけでなく『図書館』や『多賀城市』という地域全体のために活動をしているという認識を皆が共通して持つことが重要である。活動の成果は数日では表れないかもしれないが、私たちの活動が認知されて図書館に足を運ぶ人が増えることで、人がたくさん集まるコミュニティの場になると期待している。そのためには継続的に活動し、認知され、図書館を楽しい場だと思ってもらうことが必要であり、今後もその目標に向け精一杯努力していきたい。

塩釜市教育・福祉プロジェクト(浦戸合宿・小中学校・福祉支援)

【期間】

8月3日～9月20日(全6陣 約6週間)

【参加人数】

1陣27名、2陣18名、3陣43名、4陣12名、5陣9名、6陣15名 計124名

【活動場所】

4島5地区(桂島、野々島、寒風沢島、朴島)

塩竈市本土

【宿泊場所】

浦戸諸島総合開発センター(ブルーセンター)

【活動内容】

<教育支援>

昨年度同様、小中学校でのサマースクール、けやき教室(適応指導教室)、保育所にてボランティアを実施するとともに、本年度は老人ホームでの活動も行った。

浦戸合宿

【活動期間】

第1陣 8月7日(水)～8月9日(金)

【活動場所】

塩竈市浦戸諸島

【参加者数】

全14名

【活動目的】

東京の大学生が学習をサポートし、学校の授業とは異なる非日常的な経験を子どもたちに与えることで学習意欲の向上を目指す。また活動を通して浦戸諸島の魅力を本土にいる子どもたちに知ってもらい、浦戸諸島を訪れるきっかけを作ることを目的とする。

【活動内容】

小学生の浦戸諸島での合宿、“浦戸サマースクール”での課外活動(自然観察や天体観測など)のお手伝いや、学習支援を行いながら、子どもたちとの交流を図る。

【浦戸合宿】

活動において私たち大学生は子どもたちがサマースクールの目的を達成できるように心掛けました。最初のアイスブレイクでは単に緊張をほぐすだけではなく、大学生が考えたレクリエーションの中で一緒に生活をする友達の名前を早く覚えてもらうことで、より友好的な関係になるように促した。このアイスブレイクを行った結果、生徒同士の異なる学校から来たという「壁」を壊すことができ、生徒一人一人に友達を大切にする意識が芽生えたと感じた。砂浜アート・天体観測・浦戸学習(クルージング)では大学生が率先して子どもたちと共に活動することで、子どもたちが進んで学ぼうとする姿勢が見受けられた。砂浜アートでは海岸の漂流物を用いてグループ作品を作ることで生徒間での協調性が育まれただけでなく、海辺で活動することで震災に対する恐怖心を克服する機会にもなった。また、天体観測で見えた流れ星や浦戸学習で学んだ牡蠣の養殖などは浦戸諸島でしか体験出来ないことを大学生から子どもたちへ伝えることで本土では味わえない「島の良さ」を肌で感じてもらえたと思う。学習面においては普段の学校での授業とは異なり、年齢の近い大学生が勉強を教える形をとることで子どもたちの学力向上を図った。

学習の際に私たちが意識していたことは「目線の高さ」である。子どもたちから質問を受けた際に子どもと同じ肩の位置で解説をすることで、子どもに安心感を与えるよう工夫し

た。これは頭上から解説をすると子どもたちに余計な圧力を感じさせることを防ぐためである。また解説をする際にはすぐに答えを教えるのではなく、必ず最初にヒントを与えるようにした。この形をとることで、生徒自身が自力で答えを導き出す力を身に付けてもらい、学習における達成感を知ってもらうことができた。今回の活動では各班に二人ずつ大学生が参加することによって、子どもたち全員と密接に活動する機会が多くなり、生徒一人一人が学習に専念できる環境を提供できただけでなく、複数の大学生が寄り添うことで子どもたちが受けた影響も大きくなったと思う。また不測の事態が起きても迅速に対応することができた。

【所感】

初めのうちは、普段触れ合う機会の少ない小学生をサポートすることに対して不安を感じていたが、子どもたちの笑顔に触れ合うことで私たち大学生も笑顔になり、不安もいつの間にか消えていた。子どもたちの元気なパワーによって全体の雰囲気も明るくにぎやかになったように感じられた。

また、一緒に活動する時間が増えていくにつれて、お互いの絆が深まり最後のお別れの間には涙を流しながら子どもたちを見送る学生もいた。浦戸合宿終了後も、参加した小学生から「みんなに会いたい」と言ってもらうなど、その場だけでは終わらない関係が築けたのではないのかと非常にうれしく思う。

子どもたちは私たちのことを先生と呼んでくれていたが、私たち学生は学校の先生とは違った立場でより身近な存在として子どもたちと関わることが出来たように感じた。

今回は初めて浦戸諸島に訪れたが、たくさんの自然や島の人々の温かさに触れたことで、とてもよい場所だと感じ、この浦戸諸島の良さを塩竈市本土の小学生にも知ってもらい、「浦戸諸島でのかけがえのない思い出を作ってもらいたい！」という想いで今回お手伝いをさせて頂いた。この浦戸合宿は私たち大学生にとっても忘れられない大切なものとなったが、それ以上に子どもたちにとっても大切な思い出となってくれていたら本望だ。

東北を訪れることや小学校の活動を担当させて頂くことなど、初めての経験で戸惑うこともたくさんあったが、小学校の活動を通してみんなで協力して一つのものを作り上げていくことの大切さを学ぶことができた。今回学んだことをこれからの活動にも活かしていきたいと思う。

月見ヶ丘小学校

【活動期間】

第3陣 8月21日(水)～8月22日(木)

【活動場所】

塩竈市立月見ヶ丘小学校

【目的】

夏休み最後の週で行われるサマースクールで学習支援を行うことで2学期から始まる授業で良いスタートが切れるようにサポートする。

【活動内容】

8月18日～8月22日の5日間月見ヶ丘小学校で行われているサマースクールに最終日2日だけ入り月見ヶ丘小学校の3年生～6年生を対象に学習支援を行った。小学生が与えられた課題に取り組み、わからないところを先生や私たち大学生が教えるというスタイルを取った。午前中の9時10分から開始し45分を3コマ行った。各クラスに大学生は2人一組で入った。

【参加者数】

全7名、担当クラス：3年生～6年生

【所感】

サマースクールに入る前に私たちが意識していたことは「先生よりも小学生に近いお兄さんお姉さんという立場で生徒に接していくこと」だ。もちろんあくまでも学習支援として入っているためある程度先生のように教えたり注意したりすることは前提であるが、ただそれだけではなく生徒にとって親しみのもてる“人”として彼らに接することで学習面や生活面でのサポートが行いやすくなると考えたためだ。

実際に活動に入り、まずは学習指導を通して生徒達と心を通わせるところから始めた。初日はやはり生徒達も緊張しており中々話しかけても反応が薄い面もあったが、手応えを感じることもできた。2日目になると逆に彼らの方から話しかけてくれ、休み時間に遊びに誘ったり特技を見せてくれたりする子もいた。話しやすくなったということもあり、学習の時間も積極的に質問や採点を大学生に頼みにくるという嬉しい出来事もあり、私たち大学生は生徒たちの輪に上手く溶け込めたのではないかと感じた。

初日の反省として出されたものは、質問される内容が答えを教えるだけのもの(漢字など)の場合どうすればよいか、というものだ。ただ答えを教えるだけでは生徒のためにならない

が、暗記物に関しては答えを教える以外の方法がないため、どう指導すれば彼らのためになるかということについて思案を巡らせた。そういった質問に対しては答えよりも「どのように覚えればよいか」、また「忘れてしまった時にどのように思い出せばよいか」という指導を行った。例えば、漢字の質問を受けた際には類似した漢字を教え思い出させるなどだ。そうやってヒントを与え生徒自身に考えさせることによって、少しでも彼らの「考える力」の向上を図った。

このような指導も彼らとうまく心を通じ合わなければ出来ないものであり、コミュニケーションの大切さを改めて認識した。最後のお別れの際には小学生から手紙や手作りのアクセサリーを貰い、私たち大学生が今回活動に参加したことを生徒達が嬉しく思っていることを強く感じる事ができた。「考える力」というものはすぐに身に付くものではなく長い期間を使って養っていくものだ。今回私たちが指導したことを今後も生徒達が実践し、少しでも彼らの身に付いていれば嬉しい。

【今後について】

2 日間の活動を通して私たちが小学生に様々なことを教えると同時に小学生から学ぶことも多くあった。特に印象的だったのは彼らが前向きに生きようとする姿だ。月見ヶ丘小学校は丘の上に設立されているため津波は来なかったが、地震の被害の大きかった場所だ。

震災から 2 年経つ現在でも当時のことを思い出し怖がる児童もいる。しかし彼らの一生懸命に課題に取り組む姿から、多くの児童は今をひたむきに生きているように思えた。それは決して震災のことを忘れていたわけではなく、震災のことを噛みしめた上で一歩ずつ彼らなりに前に進もうとしているのだと思う。月見ヶ丘小学校の先生は「塩竈を復興するのであればまず塩竈の中身を担う人を育てていきたい」と仰っていたが、まさにここの子どもたちはその指導が実りつつあり、彼らが大人になった時には塩竈市の復興を担う人間になることは容易に想像できる。

また小学生と話をしていると大学に興味を持ってくれる子もいた。東京から来た私たちだからこそ伝えられることも多いだろうし、私たち大学生のそのような姿を見て興味を持ってくれたのであればこれ以上の喜びはない。

この活動ではボランティアとは何かということについても考えさせられた。現地の方の話によくあがるのは、ボランティアに来てもらっても 1 回や 2 回で終わってしまうということだ。その場しのぎの活動をしては何も解決につながらないということにも改めて気づかされた。継続して活動を行うことこそ今の被災地にとって必要なことであると思う。

短い期間ではあったが、帰り際に子どもたちや先生からまた来てほしいとのお言葉を頂いた。これからの東北の将来を担う子どもたちのために出来ることは多くある。今回は月見ヶ丘小学校における活動だけだったが、今後は市内の他の小学校も視野に入れていきたい。これからもこのような活動を様々な場所で続けていき、少しでも東北の未来に携わることが出来れば光栄だ。

中学校学習支援

【活動期間】

第3陣 8月21日(水)～8月22日(木)

【活動場所】

塩竈市立第一中学校、塩竈市立第二中学校
塩竈市立第三中学校、塩竈市立玉川中学校

【参加者数】

全25名

【活動目的】

- ・夏休み最後の一週間に開かれるサマースクールにて生徒の学習支援を行い、授業内容の指導を行うことで2学期に向けて良いスタートが切れるようにサポートすることを目指す。
- ・先生方とのトークセッションを行うことで実際の教育現場を知るとともに震災における理解を深める。

【活動内容】

＜サマースクール＞

“被災地で教育支援する意味とは何か。”また、“このボランティアに対して先生、生徒はどう思っているのだろうか。”私たちはそんな思いで活動に入った。参加者の大半が東北出身ではなく、訪れるのも初めてという人がほとんどだったため、1日目はなかなか生徒との会話が弾まず、また生徒たちも私たちに対して見えない壁を作ってしまう、参加者の中にはこの活動に疑問を抱いてしまう者まで出てきてしまった。しかしそんな中でも参加者一人ひとりが生徒たちと真剣に向かい合い、また毎晩中学校ごとにミーティングを重ねて良かったことやその日の反省を出し合い、その内容を、その後の全体ミーティングで共有した。そうすることで5日間という非常に短い期間のなかで参加者それぞれが生徒の力になることを思案し、工夫を凝らして活動に臨むようになった。最後には、宿題に励んでいる生徒たちを横から覗き込んで添削をしたり、書き間違えを指摘したり、単語などを効率的に覚えることのできる暗記方法を教えたりと、積極的に生徒たちとコミュニケーションを取りながら、生徒たちの今後の学習を見据えて様々な方法で知識を提供することができた。

部活動では生徒たちの授業では見られない姿を見ることができた。机を離れてスポーツなど自分が好きなことに打ち込む生徒たちはとても活き活きしていて、打ち込みすぎてサマースクール中に寝てしまう生徒もいた。しかし、部活動によって交流が深まり、サマースクール時にも積極的に質問してくれるようになった。

このボランティアの成果はすぐに出るものではないだろう。しかし、今回の活動が少しでも生徒たちの刺激となったのであれば嬉しく思う。さらに、昨年度の参加者のことを覚えてくれていた生徒もあり、繋がりがより強くなっているとも感じた。来年以降もこの活動を継続し、大学生と現地の生徒たちとの輪を広めたいと思っている

＜先生方とのトークセッション＞

Q.震災後の先生方はどのように対応していったのですか？

3月11日は卒業式で、ひと段落していたところに地震がきました。そして突然激しい揺れが来て、揺れが収まると停電し情報が完全にシャットアウトされました。そのため、津波の被害を受けたことを知ったのも2日後だったそうです。宮城県では30年に1度大きな地震が来ると言われている。震災当日も中学校の体育館にたくさんの人が避難し、先生方は3日ごとに交代で見回り、子どもたちを不安にさせないことに努めました。生徒たちには全員の家の家庭訪問を行い、アンケートを取り、今後学校が再開してからの心のケアを重点的に行ったそうです。学校としても震災後、生徒たちの心に留意しながら、定期的に防災教育を行っている。

Q.ボランティアをどう思うか？

わざわざ東京から来たこと、生徒の勉強の意識の差がある中で教えていたことに大変感謝してくださいました。多くの生徒が塩竈から出たことがなく、青学生が来ることは、子どもたちにとって新しい人との関わり方を学べるとてもいい機会となったそうです。また青学生にはこの活動を通じて今後はボランティアをしようと思って訪れるのではなく、今のように暮らしているのかを私たちが感じ、東京に持ち帰り広めることで、東京に住む人たちに震災時のままである被災地の時間を動かしてほしいと仰っていました。

Q.生徒たちを今後、どう育てていきたいですか？

生徒たちには将来また地震が起きた際に、先頭に立って地域を引っ張ってほしい！そのために現在、1年生では総合的な学習の一環で防災マップの作成に取り組むなど、防災教育に力を注いでいる。未来の塩竈を担うリーダーシップのとれる、自分で多角的に判断できる大人になることを望んでいました。

【今後の展望】

ある生徒が活動の最終日に「青学に入りたい！」と強く言ってくれた。また先生方は「1週間で1ページしかできなかった子が、3ページも進んだ」と私たちの活動に感謝して下さった。このような報告に参加者もやりがいや被災地に対する思いを強く感じる事ができた。そんな私たち大学生と生徒たち、先生方との“繋がり”を通して、今回の活動は今後も継続的に行っていくべきであると実感した。宮城県は地震が多く、今後またいつ同様な

災害が起こるか分からない。そんな時にこの震災を経験した子どもたちがリーダーシップを発揮して、地域の先頭に立ってくれることが先生方の願いだった。そんな未来に向けてこの“繋がり”が今後の塩竈を輝かせる一部になれることを願っている。

けやき教室

【活動場所】

宮城県塩竈市けやき教室

【活動期間】

第1陣：8月5日(月)～9日(金)

第3陣：8月19日(月)～23日(金)

【参加者数】

第1陣2名 / 第3陣 3名

【活動目的】

けやき教室に通う子どもたちが、学業の面で他の子どもたちとの差が広がらないようにする。学習における基本的な能力を身に付けていない子もいるため、ただ勉強を教えるというだけではなく、勉強の仕方を教えることにも心がけ、また勉強だけでなく、生徒とのコミュニケーションをとることにも重点を置く。

【活動内容】

○学習支援

・登校してくれた生徒に、1人につき大学生1人の、マンツーマン指導で学習支援をした。

・一定時間で区切って、科目・担当者を変えるなど、子どもたちの集中力を切らさぬよう努力をした。

・勉強の仕方を身に付けさせるために主にワークを用いて学習の手順を一から教えた。

・中学3年生も多かったため、受験も意識して指導した。

○生徒間交流(主にお昼休みの時間)

・みんなで集まってお昼を食べ、生徒たちとコミュニケーションをとった。

・トランプやお喋り・似顔絵の描きあい、スポーツ(バドミントンなど)をすることで、生徒たちの距離を縮められるように心掛けた。

【所感】

不登校が社会問題となっている現在、どれだけの人がこの事実に向き合い、この事実を自分の目で確認しているだろうか。多くの人はこの事実を深く考えず、間違った解釈でとまっているのではないかと思う。けやき教室へ活動に行った大学生の中には「学校に通うことを困難とする子どもたちなのだから何かが足りない」、「何かが違う」、といった考えが頭のど

こかにあった。しかし活動をする中で、それは私たちの思い込みであったことに気付いた。

1 陣・3 陣合わせて 10 日間という短い期間の中で生徒たちと過ごして気づいたことは、学校へ通う、通わないに関らず、子どもたちは皆同じだという事だ。けやき教室の子どもたちも同じ年代の子どもたちと同じような話題で盛り上がったり笑ったりするということが気が付くまで時間がかかってしまいました。前述したような先入観に囚われていたためだ。しかし、そのことに気づいてからは、すなわち私たちボランティアがまっすぐ向き合えば、子どもたちも素直に答えてくれると気づいた日を境に、教室内の雰囲気も大きく変わり始めた。そしてその雰囲気の影響を受けて徐々に生徒たちにも変化が見えるようになった。いつもは登校する時間が遅い生徒が、1 時間目が始まる 30 分前に来てくれるようになったり、いつもはお昼を持ってこない生徒が持ってきてくれるようになったり、また、普段笑顔を見せないような子が人前でも笑えるようになったりした。笑顔を見せるようになってくれた子に関して、けやき教室の室長さんから「あの子がここまで笑顔になったのは今までにない。」というお言葉をいただいた時は、本当にやってよかったと感じるとともに、自分たちの活動が自己満足ではなく、人の役に立てた活動であったと実感できた。活動の最終日には職員の方々、生徒一人ひとりと感謝の言葉を交わしお別れをした。生徒たちは私たちが見えなくなるまで手を振ってくれた。最後に生徒全員が大きな声で「ありがとうございました」と感謝の言葉を叫んでくれた時は、けやき教室の生徒があんなにも大きな声を出して感謝してくれるとは思っておらず、私たちにこんなにも心を開いてくれていたのだということが伝わってきた。

今回の活動を通して私たちはけやき教室の生徒たちを少しでも変化させることができたと思う。年齢が近い大学生が生徒と接することで生徒は心を開きやすくなり、また勉強でわからないところを聞きやすいといったメリットがある。実際に生徒が職員の方から勉強を教えてもらっている時よりも、大学生から教えてもらっている時の方が堅くならず、質問してくれることも多々あった。つまり私たち大学生が生徒たちに良い刺激を与えることができ、学習へのモチベーションの向上につながっているのではないかと思うと同時に、

今回それらを達成できたのではないかと思う。けやき教室での活動は夏期だけではなく冬期も行うなど継続的に活動することで、より成果が見えてくるのではないかと思う。

教育を共有と書く人がある。私はこの考え方に大いに賛成だ。教育とは指導者が生徒に対して一方的に行うものではなく、指導者と生徒の協力によって成り立つものだと思身をもって理解した。このボランティアでも同じだ。我々だけが何かを施すのではなく、生徒とともにやっていく。お互い、真っすぐに。今まで自分たちが逃げてきた不登校というテーマを通して、学校内での、教員と生徒のあるべき姿を再確認できたと思う。

福祉支援活動

【活動期間】

8月19日（月）～8月25日（日）

【活動場所】

社会福祉法人大和福寿会

介護老人保険施設 やまと塩竈

通所リハビリテーション やまと塩竈

老人短期入所施設 しおり

デイサービスセンター しおり

グループホーム やすらぎの里

【参加人数】

全2人

【活動目的】

利用者とコミュニケーションをとることで、施設の利用者の刺激になり、心に安らぎを与える。

【活動内容】

施設の利用者との会話、入浴の介助を行った。

施設の利用者との会話では、野々島での生活や宮城の方言などについてお話しし、利用者との会話を楽しんだ。活動初日の施設では、話すことができない利用者や歩くことができない利用者が多かった。そのため、利用者とコミュニケーションが余りとることができなかった。また、話すことができる利用者も利用者側から話しかけてくれる方は少なかった。しかし、これを改善するために、こちら側から積極的に利用者に対して声をかけるようにした。そうしたところ、最初はなかなか話してくれなかった利用者も次第に話してくれるようになり、会話も弾むようになった。利用者との会話で課題となったことがもう一点あった。それは、会話の話題だ。利用者の方がどのような話題で会話が盛り上がるかわからなかったため、利用者となかなか会話が弾まないことがあった。そのためには、まずは自分自身の出身地などの情報を利用者に提供するようにした。その結果、相手が私たちに興味を持ってくれ、また利用者も昔住んでいたところなど自身の情報を提供してくれるようになり、会話が弾むようになった。入浴の介助では、浴室で利用者の髪の毛や体を洗ったり、髪の毛をドライヤーで乾かししたりすることを行った。入浴介助などの身体介護は、初めてのことであったため、戸惑うことが多かった。しかし、介護職員の方に「どのようにすればよいでしょう

か？」というように尋ねると、アドバイスをいただけたので、それをもとに活動したところ利用者に気持ちよく入浴してもらうことができた。

【所感】

活動初日の施設では、会話ができない利用者が多く、また身体的な介護を必要とする利用者が多かった。身体介護を手伝うことができず、コミュニケーションをとることもできなかったため、ボランティアとして貢献できているのかわからず、もどかしさがあった。しかし、活動が進むにつれて、比較的障がいの軽い方が利用する施設で活動するようになり、それとともに利用者とのコミュニケーションがとれるようになり、身体介護では入浴介助をメインに少しずつ手伝えるようになった。それによって、やりがいを感じられた。

私たちは活動を通じて、介護の現場、実情を見た。私たち参加者は今まで福祉施設でのボランティア経験がなかったため、コミュニケーションだけでなく、入浴介助などの様々なお手伝いもできたことはとても勉強になった。

また、利用者の方のあたたかさに触れることができた。私たちの活動が利用者の刺激になり、少しでも普段の施設の生活とは異なった楽しい生活を送ってもらえたならば幸いだ。

塩竈市経済復興支援活動

【活動期間】

第1陣 8月3日(土)～第6陣 9月20日(金)

【参加者数】

全 126 人

【経済復興支援活動行程表】

	午前	午後	活動地域
1 日目	移動	アイスブレイク	浦戸諸島
2 日目	野々島島歩き	担当地区島歩き	
3 日目	漁業支援・草刈り・祭り準備等 (浦戸諸島での活動)		
4 日目			
5 日目			
6 日目	塩竈市本土調査 (塩竈市 WEB 広報活動)		塩竈市本土
7 日目			
8 日目	総括 MTG	移動	

※1日目・2日目・8日目は教育支援と同じ活動。

【浦戸諸島の様子】

昨年度に引き続き、野々島のブルーセンターに滞在しながら浦戸諸島での活動を行った。住民の方の中には昨年度の活動を覚えていて下さっていた方や、昨年度お渡ししたボランティア・ステーションの帽子を被って下さっている方もたくさんいらっしゃって、今年度も島で活動する私たちを温かく迎え入れて頂いた。

昨年に比べると工事の進捗は、野々島では途中となっていたが、防波堤や土地のかさ上げの工事が進められていた。同じように、寒風沢島でも土地のかさ上げ工事や浮き桟橋の改修が進められていた他、桂島では第2陣(お盆の時期)頃から、汽船待合所前までのかさ上げ工

事も始まっていた。このように、昨年よりも少しずつですが復旧作業も進み、また、ブルーセンターでは島の方々によるカフェの企画が進んでいるなど、復興に向けても進みだしていると感じられた。

【活動内容】

I. 花火大会

<8月13日 桂島>

桂島の花火大会では主にテントや机の準備、提灯の取り付け作業等の会場準備を行った。また、花火大会で販売するフルーツのカットや、島で取れたアサリを使用して作る“アサリちゃんコロッケ”を島のお母さん達と共に調理した。お祭りでは、出店やビンゴ大会のお手伝いをしながら青学生全員で盆踊りにも参加し、島の方々と共に、桂島のお祭りを盛り上げることができた。最終的に会場内のゴミを回収してまとめ、お祭りでの手伝いは終了し、その後小学校で行われた反省・打ち上げ会に招待して頂いた。

桂島の方によると、花火大会には昨年よりも多くの方が本土より訪れていたということであった。桂島のお祭りは、島の方々が手作りで作り上げていくところが魅力であり、手作りであるからこそ、毎年違った花火大会が楽しめるのだと教えて頂いた。

花火大会の最後には本土から来てくれた方々が気持ちよく帰宅し、再び島を訪れるようにと、皆でカラフルなテープを用いてフェリーの最終便を見送った。桂島の方々の観光客を迎える温かい気持ちと、「また桂島に来てほしい」という思いが伝わったのではないかな。

<8月14日 野々島>

野々島の花火大会では出店の手伝いをしながら、盆踊りにも参加した。

昨年は花火の打ち上げだけであったが、今年は出店も並び、櫓も建ち、震災後初めて盆踊りを行うことができた。しかし今年櫓が建てられた場所は、震災以前とは違う場所であり、震災以前は現在かさ上げの工事が行われているもう少し広い場所であったということであった。野々島の花火は島の漁師さんが花火師の資格を取り、全て手作業で打ち上げていることはこの祭りの魅力でもあり、住民の方々が島のことが好きだからこそできる花火大会である。震災以前の花火は、現在工事が途中で止まってしまっている防波堤から打ち上げられていたようで、そこからだとより大きくて迫力のある花火が打ち上げられていたということであった。野々島の住民の方からは、今年出店と盆踊りを実施できたことを通過点とし、来年はより大きな祭りにしたいとの話もうかがった。是非来年も参加し、今年以上のものにしていきたい。

II. 草刈り

第1陣から第6陣まで全ての陣で浦戸諸島内の幅広い範囲で草刈りを行った。島は人口減少や高齢化が進んでいることから草刈りを行うのも難しい状態であり、特に敷地外の場合

所では手を加えられていない部分がほとんどで、雑草は背丈を超えるほどにまで伸びている場所も多く見られた。島で活動している私たちを温かく迎えてくださる島の方々への感謝の気持ちと共に、島の景観をより良くしていくこと、島の方の暮らしやすい環境作りのために行った。どこで草刈りを行っていても多くの方々に声をかけて頂いた。

草刈りは外観をきれいにすることはもちろん、草刈りをしている最中に通りかかった島の方々とあいさつを交わしたり、話しかけていただいたりするなど、島の方々と交流するきっかけとなるものであった。

Ⅲ. 漁業支援

浦戸諸島は昔から漁業が盛んであったが、震災によって港、船、作業場が津波の被害に遭い、漁業にも甚大な被害が出た。それでも島の漁師さん方は浦戸の海や環境が好きで、また同じ場所で漁業を再開した方が多いということであった。

第1陣、第2陣、第4陣、第6陣では、桂島・野々島において漁業支援を行った。

昨年度から引き続き行った海苔の養殖のお手伝いをはじめ、今年度は新たに牡蠣やホヤの養殖の手伝いも並行して行うことができた。私達の青いTシャツを見て声を掛けて下さる方もいっしょに、活動に対して一段と気合いを入れるきっかけとなった。

	状況	活動内容
ホヤ	・震災によって、ホヤが全滅してしまった南三陸や気仙沼にホヤの種苗を出荷。 ・浦戸諸島では水深・海水温といった条件により一定の大きさ以上に育たない。 - しかし、病気を持たない天然の親ホヤが生育しており、良質の種苗生産が可能。 ・養殖には牡蠣殻を使用して種付けを行う。	・牡蠣殻収集と洗浄。 ・ロープカットと網作り
牡蠣	・牡蠣処理場が津波の被害を免れたことから、震災後早々に操業を再開できた。 ・冷凍技術により、新鮮な牡蠣を日本国内だけでなく、海外にも広めようという動きがある。 ・養殖にはホタテ貝の殻を使用して種付けを行い、牡蠣を生育させている。	・ロープカット ・ホタテ貝の殻にロープを結び付ける ・網の洗浄 ・ロープに種牡蠣を挟み込む
海苔	・海苔養殖は震災後、間も無く再開。 ・現在では、浦戸での漁業従事者が一番多い。 - 若い漁師も増えつつあり、今後に期待可能。	・養殖用の網の乾燥作業と運搬作業

＜1. ホヤ＞

第1陣では、今浦戸で力を入れているホヤの養殖のために必要な牡蠣殻の収集と洗浄の作業を主に行った。ホヤの養殖では、牡蠣の殻にホヤの種を付着させ、その上で成長させていく。そのために使用するきれいな形の牡蠣の殻を、牡蠣殻の集積所の中から探し集める作業の手伝いをさせて頂いた。炎天下の中であったが 9 人で 90 分ほど集中して拾い集め、籠にして 10 箱、約 2000 個の牡蠣の殻を集めることができた。

作業 2 日目には集めた牡蠣の殻を、たわしを用いて洗浄した。牡蠣の殻に泥がついていると、ホヤの種がうまく牡蠣の殻につかないため、前日に集めた牡蠣の殻を一つずつ丁寧に洗浄した。長い間集積場所に置かれた殻は泥まみれで、汚れがこびり付きなかなか落としにくいものもたくさんあり、想像以上に時間がかかる作業であった。

第2陣、第4陣では、ホヤの種苗生産に使用する“しゅろ”という植物のロープを 10m にカットし、段ボールに巻きつけながらまとめ、束ねるという作業を行った。全部で 1 万メートル以上のロープを扱い、全ての作業を終えた。

＜2. 牡蠣＞

牡蠣の養殖に使用するロープの準備と、そのロープを牡蠣の種付けに使用するホタテ貝の殻に結び付ける作業を行った。昨年度の牡蠣の養殖に使用したロープを解いてカットし結び直したが、固く結ばれたロープは解きにくい部分も多くあった。結び直したロープを、ホタテ貝の殻に結び付ける作業では、固結びしなくても、通すだけで紐がほどけないような工夫されたつなぎ方を教わり、一本ずつ丁寧に結びつけていく作業を行った。養殖ではこれらのホタテ貝の殻を網で覆い、水槽に入れて種付けを行った。その際に使用する網の洗浄作業も行い、また、実際に種牡蠣のついたホタテ貝をロープに挟み込む作業や、海へ出て養殖用のいかだに結びつける作業のお手伝いもさせて頂いた。牡蠣の作業は遅れている部分が多く、まだ終えられていない作業もあった。

＜3. 海苔＞

第1陣では、海苔の養殖に使用する網を乾燥させる作業の手伝いを行った。具体的には、地面に広げていた網を裏返し、反対の面を天日干しする作業と、乾いた網を倉庫まで運搬する作業である。乾燥させた網をトラックに積み込み倉庫まで運び、再び網をトラックから降ろして倉庫内へ運んだ。束にされた網は見た目以上に重さがあり、運搬用のトラックに積むのも一苦労だった。島の漁師さん達だけではなく、青学生の若さと人数とを活かし、また運搬方法も工夫する等して効率よく作業を終わらせることが出来、余った時間で別の作業を行うこともできた。

<4. 人手不足・高齢化>

今回お手伝いしたホヤ、牡蠣、海苔などの養殖に関しても、作業には多大な労力が必要だった。また炎天下の中で行う作業や細かな作業も多く、時間が掛かる作業が多くあった。今回ホヤ、牡蠣、海苔それぞれの作業に青学生約 10 名でお手伝いさせて頂いたが、たった一工程であるのかかわらず、その多くは半日から 2 日ほど掛かってしまった。また、ひとつの陣では終わらず、複数の陣で引き継いで行った作業もあった。これらの作業を通常は少人数の漁師さん達だけで何工程も行っていることを考えると、かなりの労力と時間が必要であることは明らかであり、私達も作業を通して、浦戸諸島での漁業に関して人手が足りないことを痛感した。また、高齢化が進んでいる現在ではこれらの作業が重労働であることに加え、後を継ぐ若い人達がいけないことも問題であるという話もうかがった。漁業といっても、教えてもらえば私達にもできる作業がほとんどであるし、今回青学生が手伝ったことで少しでも漁師の皆さんの負担を減らし、作業を効率的に出来たのであれば幸いである。

<5. 漁師さんのお話>

島の漁師さんによると、震災により被害は受けたが、桂島では漁船が多く残ったために、漁業の再開を早いうちにすることができたそうである。養殖に必要な多くの道具や、軽トラックなどは寄付してもらったものも多く、そうした支援があったからこそ再び漁業ができているということだった。

ある牡蠣漁師さんが、「牡蠣を作りたいくて牡蠣の養殖をしているのではない。ここでは牡蠣ができるから牡蠣を育てている。」と話してくださったことが印象的であった。浦戸諸島の海が好きで、浦戸諸島だからこそ漁業をしているという島への愛が伝わってきた。

また、「漁業についての過程や大変さをあまり知られていないために、消費者は価格だけを見て『高い』と判断する。値段の分だけ努力と手間と愛情がこもっているのであって、本当においしいものを多少高くても食べてみてほしいし、漁業についてどういう風に行われているのか、もっと知ってもらいたい。知ればわかる。」とも話して下さった。

浦戸諸島産の海産物を味わってほしいということはもちろんだが、それだけではなく、漁業についても外部の人々に知ってほしいという思いが強いということを感じた。

<6. 海産物のブランド化>

浦戸諸島で養殖し出荷する海産物について、「ブランド化」して販売していこうという動きが高まっている。

<ホヤ>

→主流であった韓国産のホヤの種に病気が出てしまったことから、浦戸諸島のホヤにより注目が集まっている。

→天然の病気を持たない親ホヤの希少性を活かして種苗生産を行い、単価を上げて出荷していくことでブランド化させていく。

<牡蠣>

→浦戸諸島で出来る牡蠣は小さくても締まりがあり、新鮮であるという特徴を売りに出荷していく。一般市場では大きくて見栄えの良いものに高値がつくことが多いが、オイスターバーのような店舗と直接つながることで、本当においしいものを適正な価格で販売していきブランド化を図っていく。

→浦戸諸島での漁業は、消費者受けの良いうように量産して安く販売するのではなく、島の環境を活かして養殖を行い、養殖にかかる手間とコストに見合った適正な価格でおいしさを届けていきたいという思いが強い。そして、海産物をブランド化させていくことで漁業を盛り上げ、話題性も生み、復興へと繋げていくことができると感じられた。

IV. 所感

昨年度も浦戸諸島において活動を行いました。昨年よりも島の方々とお会いする機会が多かったように感じた。島では昨年の活動を覚えていて声を掛けて下さる方もたくさんいらっしゃり、また私達のシンボルともなっている“青いTシャツ”を着て作業をしている私達を見て、声をかけてくださったことから今年新たに始まった作業もある。例えば、漁業支援に関しては、昨年度は海苔の養殖支援だけであったが、今年は新たにホヤと牡蠣の養殖支援にも携わらせて頂いた。このように活動している私達の姿を見て声をかけてくださり、活動の幅が広がっていくことは私達にとって励みにもなり、嬉しいことである。また、継続的に活動していることで、島の方々との距離も少しずつ縮んでいるのではないかと感じている。

漁業支援の活動中には漁師さんたちと話す機会も多く、震災のこと、漁業のことなど様々なお話を伺った。島に住む方々にとって、私達学生は孫と同じ世代であり、だからこそ一緒に作業が出来ることが嬉しいという声もかけて頂いた。ただ作業を手伝うだけではなく、島の方々と一緒に作業することでコミュニケーションをとることができ、このような言葉をかけていただけたことがとても嬉しい。このようなことも私達学生が浦戸諸島でボランティアを行うことのひとつの意義でもあるのではないだろうか。

活動を通して初めて知ることが多く、この場所だからこそ知ることができたのだと思う。また、島のことや漁業のことについて、「知ってほしい」という思いを持っている方が多いように感じました。この「知ってほしい」というニーズを実現するためのきっかけを作るとは私達に出来ることのひとつであり、また、これは継続的に活動を行うからこそ出来るも

のもである。昨年よりも多くの方に声をかけていただいたという実感もあり、改めて継続的に活動することの重要性を感じる事ができた。

私達は漁業支援や草刈等、ほんの一部だけしかお手伝いすることが出来なかったが、それでもたくさんの感謝の言葉を頂き、行っている活動の必要性、重要性を実感することができた。こういった小さな活動を積み重ねることで、少しでも浦戸諸島の方々のため、塩竈市のためになるように、私達に出来ることを今後も継続して行っていきたい。

塩竈市 WEB 広報活動

【活動内容】

本年度、AGU-VS では塩竈市およびその周辺の「WEB 広報活動」を行った。今年度の活動の動機は、昨年度のボランティア活動で滞在した野々島(ブルーセンター)・浦戸諸島をはじめとした塩竈市の素晴らしい魅力に触れ、その素晴らしさをより多くの人たち・広く塩竈の外へ伝えたいということ、その過程で塩竈市へ微力ながらも貢献できるのではないかということを感じたからである。

「WEB 広報活動」とは“しおがまふれあい街歩き”の名のもと、塩竈とその周辺のスポットを飲食店・物産品・観光・自然・歴史・文化の 6 つのカテゴリーに分類し、学生の視点から“塩竈の魅力”を見つけ出し、調査取材(写真撮影・インタビューが中心)を行い、ガイドマップを作り発信していくというものだ。

なお今回の取材調査においては、株式会社 SAMSUNG 電子ジャパンより支給して頂いた GALAXY Tab10.1 を用いて、ガイドマップの説明を行い、本企画への了承を頂いた。

【調査報告】

<松島>

塩竈市から少し離れたところに日本三景の一つとして有名な松島がある。塩竈を訪れる観光客の大半が松島を訪れるということもあり、JR 松島海岸駅付近の調査を行った。松島では 3 人ずつ 3 グループに分かれ、実際に自分達で目で見たり、お店の方にお話を伺ったりする等して、情報収集を進めた。1 日目は下調べとして実際に歩いてみて、気になるころがあればお話を伺い、その情報をもとに 2 日目により詳しく調査を行った。

松島は全国有数の観光地であり、調査を行っている際も多く観光客が見受けられた。自然も豊かで、歴史もあり、中心部はとても栄えていたが、道をひとつ外れると閑静な住宅街でもある。松島も震災による津波の被害を受けており、様々な場所に当時の写真が展示されていたのが印象的だった。

また、有名な観光地であるということから、震災直後から地元の方々総出で復興作業に取り掛かり、震災から約 2 ヶ月後のゴールデンウィークには観光客を迎え入れることができる状態にまで復旧した。しかし始めのうちは観光客といっても、復旧作業で来ている土木関係者やボランティアで来ている人達が帰り際に少し立ち寄るという程度で、子ども連れの家族等といった本当の意味での観光客が増えてきたのは、今年のゴールデンウィーク辺りからということであった。

松島の観光についての今後の展望をお聞きしたところ、松島は“人が集まること”ではなく、“昔からある文化を伝えること”を一番の目的としているという。そのため、元々あるものを活かした観光事業をアピールしていきたいと仰っていた。現在はまだ地元の観光客が多いとのことで、全国の人達に、代々伝わる松島の良さを知ってほしいとも仰っていた。

今回私達の訪問に関して、ここに住む方々自身が自分達の地域の良さを見つけることには限界もあり困難であったが、そこで「私達自身で良さを見つけられていない。客観的に見た良さを見つけてくれると嬉しいし、それを教えてほしい。」との言葉を頂いた。

松島は観光地であることもあり、WEB 広報についても積極的に多くのお店のご協力を頂いた一方で、観光地であるからこそ、お店の方が忙しいことも多くなかなかお時間を割いていただけなかったり、逆に時間を取らせてしまったりと、調査の難しさも感じた。調査の中で、観光客がよく来るところ以外にも景色が綺麗に見えるところや、歴史的に重要な場所なのにあまり知られていないところも多いという話も伺い、そのような場所について私たちで情報を発信していくことで、松島の魅力を更に伝えられるのではないかと考えている。

<塩竈市>

塩竈市内においては、主に市内を JR 塩釜駅、東塩釜駅、西塩釜駅、本塩釜駅に分けて調査活動を行った。毎週学生は、3 人一組の班に分かれ、お店や自分の目で見て良いと感じた場所などを記録し、さらに WEB 広報をする際に視覚から得られる情報や与えられるインパクトが大きいということで、意識して写真を撮るようにもした。

西塩釜駅周辺は、駅を境に住宅街と商店街に分かれていた。震災時、丁度この商店街辺りまで津波の被害を受け、そのため震災を機にお店をやめてしまった方が多いそうで、調査を行っている際に何度も“シャッター商店街”という言葉を目にした。商店街では和・洋を問わず御菓子のお店がよく目に付いた。これらの中には地元の方だけではなく、石巻の方からわざわざ買いにくるなど、人気があるお店も多くある。商店街にある八百屋や酒屋では、近所の方々に愛されたお店が多く、お店に入ると世間話が始まるような温かい雰囲気であった。“震災前の活気を取り戻したい”と願う方も多くあったが、現状は震災を乗り越えて再開したお店も後継者がおらず、店を閉めることを考えているお店もいくつかあるということであった。しかし一方で、商店街には創業 100 年以上のお店もあり、伝統を感じさせる部分も多く見られた。

WEB 広報に関しては、受け入れてもらえなかった場所も何箇所もあったが、それだけ地元に着目した、近所の方々に愛されている場所が多いということを実感できた。また、シャッター商店街といわれる中でも、何とか“商店街を盛り上げよう”と懸命に取り組んでいる方もいらっしやった。今後、そのような方々の後押しとなるような広報を行っていきたい。

本塩釜駅周辺は特に史跡・御菓子屋・お寿司屋さんが多く見受けられた。老舗の和菓子屋では“歴史ある塩竈”を形にし、洋菓子店では塩竈に“新しい風”を吹き込んでいると感じた。お寿司屋さんは全国的にも多いことでも有名であり、それぞれのお店が突き詰めたうまいと思う自信の逸品を提供しつつ、お互いの店が切磋琢磨しつつ、復興に一役買おうとする姿が印象的だった。

また、神社の門前町ということもあり、観光客の姿も多く見られた。鹽竈神社は式年遷宮(本殿の建て替え中)の期間であったものの、松島観光の途中に立ち寄るといった観光客、ま

た、安産祈願の神を祀っていることから若い女性やその家族といった多くの方々が参拝に訪れていた。

インタビューでは WEB 広報での発信という観点から歴史に関連した質問を多く行った。調査を通じ、鹽竈神社は特に門前の“塩竈海道”沿いの人々の生活に欠かせないものであることを強く実感した。また、塩釜駅周辺では文化系の施設や印象的な洋菓子店が多く、本塩釜駅周辺とはまた違った魅力のあるお店が立ち並んでいたことが印象的だった。

【所感】

今回、このガイドマップ作りの調査活動を行っていく過程で、以前の塩竈市の様子や震災によって変わってしまった街の様子についてお話を伺うことができた。

取材に関しては、初めての試みであったこともあり、戸惑いの連続であり、取材願いに限っては、特に飲食店では昼時の繁忙期は避け、別の箇所を回る等、限られた時間の中でのスケジュール調整が難しかった。中には取材を断られてしまうこともあったが、その多くは飲食店だった。“地元塩竈市の中だけに知られていれば構わない”といった考え方、広報後に客が殺到し“通常通りのサービスの提供が難しくなる”といったこと、かつて私達と類似した広報活動に協力したのも拘らず“思いがけない店の評判を耳にして、精神的なダメージを負った”といったことがあったそうだ。このようにあえて外への発信を行わないという考えも一部にはあることも、今回の活動を通じて知ることができた。

しかし、ほとんどの訪問先に共通していたことは、皆さんが“塩竈という街が好きで、仕事に誇りやこだわりを持って日々の生活を送っている”ということである。今回取材をできなかったお店でも、私達を温かく受け入れ商品を提供して下さった。また震災時の様子やご自身の体験をお話頂いた中にあったように、私達が“塩竈のことを伝えるということ”と同時に、“震災のことも風化させないで欲しい”という気持ちを感じ取ることができた。

塩竈市は東日本大震災時に他の宮城県の街と同じように被害を受けたが、近隣の街と比較すると塩竈市の被害は軽く、震災から 2 年半が経過し復旧した現状を見ただけでは震災の影響を伝えることは難しくなってきたといおり、同時に、その“見た目”も手伝ってメディアにはあまり取り上げられず、本当の塩竈の方々の声というものは復興という明るい話題や震災の風化によって埋もれてしまっていることを今回の活動を通して痛感した。こういった取り上げられない声が増え、精神的にも復興が遅れる中で私達が現地に入り、地元の声を聞き塩竈の外へ伝えようとすることが少しでも復興支援に繋がるのではないかなと思う。

私達の活動は決して今すぐに成果を得られるものではないだろう。だからこそ、活動が認知され、継続していかなければならないことを今回強く感じた。復興支援の難しさを肌で感じる活動だった。復興には、町興しをして人を呼び迎え入れるという“受容”が今までの一般的な考えであったが、これでは効果は一時的なものになってしまう。復興支援は“ブーム”ではない。地域内内需の限界といった経済的観点からも、これからは現地からの積極的な“発信”が不可欠になるのではないかなと思う。

AOYAMA GREEN FESTIVAL ～同窓祭～

【日時】

2013 年 9 月 23 日(月)

【活動場所】

青山学院大学青山キャンパス

【活動内容・所感】

昨年度に引き続き、塩竈市産業環境部の職員の方々にお越し頂いて塩竈市の物産店並びに昨年度お世話になった陸前高田市の軽度知的障害者就労支援施設「あすなろホーム」の商品販売を行った。

AOYAMA GREEN FESTIVAL は、主に青山学院大学卒業生による同窓祭実行委員会が主催するフェスティバル・イベントで、1994 年に始まり、今回で 20 回目を迎えた。礼拝に始まり、公開講座、シンポジウム、ステージでのパフォーマンス、福引や模擬店など、子どもから大人まで楽しむことができるたくさんの企画で構成されている。

昨年度は生憎の悪天候により、集客に困難したが、今年は天候にも恵まれ多くの方々に来ていただいた。塩竈並びに陸前高田よりお取り寄せた品物は閉会 30 分前には完売した。

模擬店では、マグロステーキ、笹かまぼこ炙り焼き共に、列ができるくらいたくさんの方にご購入して頂いた。特にマグロステーキは昨年度のリピーターも多く見られた。笹かまぼこ炙り焼きは、子ども達から大人気であり、一人で 2 本も 3 本も購入し、喜んで食べている姿を見ることができた。物販店では、おとうふかまぼこの試食を行っていたこともあり、OB・OG、保護者の方々が足を止め、商品の品定めを行っていく姿が目立った。昨年、今年度の塩竈ボランティア参加者の学生も購入していた。

全体を通して、昨年度のあの大雨の中で販売していた時のことを覚えて下さっていた方々が多く、マグロステーキからおとうふかまぼこまで幅広い商品のリピーターが多いように感じられた。現地塩竈市で行うことができる活動だけではなく、このように東京でも行うことができる復興支援活動を織り交ぜて、継続的に活動を行っていきたい。

【販売品一覧】

《模擬店》

マグロステーキ、笹かまぼこ炙り焼き

《物販品》

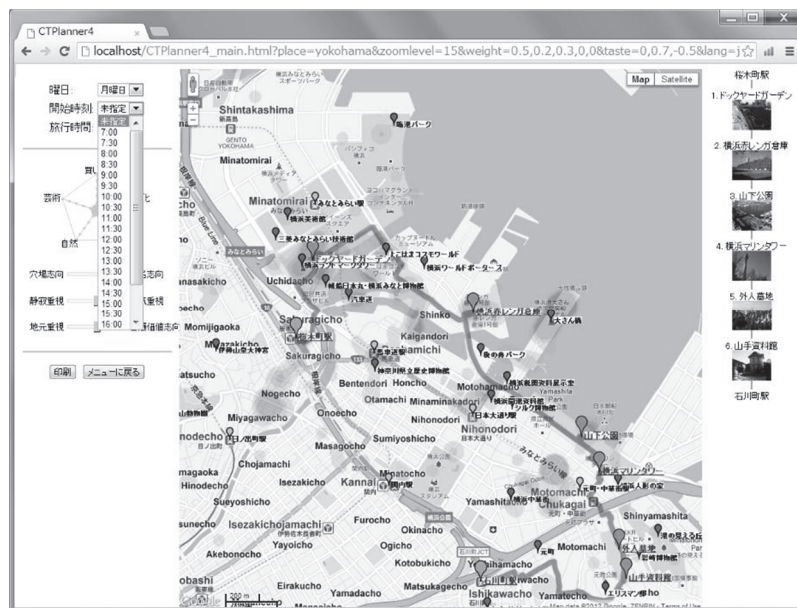
お豆腐かまぼこ、揚げかまぼこ、干物（ほっけ、赤魚、つば鯛、吉次）、しおがまバック、ずんだロール、扇子、絵馬（塩竈市）

クッキー 3 種、りんごケーキ（あすなろホーム）

【今後の予定】

この 6 週間の中で調査を行った内容をもとに CT-Planer を用いてガイドマップ作成を進めていく。

Facebook や Twitter、ブログなどといった各種 SNS とも連動させ、広くユーザー側からの意見を集めつつ、ガイドマップを改良していきたいと考えている。



※ガイドマップイメージ図

地域部「えびす青年教室」・知的障害者幡ヶ谷教室「GAYA」ボランティア

【背景】

えびす青年教室は、知的障がいのある人の社会教育活動支援、社会的ハンディキャップを背負った障がい者の社会参加の支援のため、障がい者とボランティアがともに活動することによって、障がい者とボランティアの人間の成長、相互理解・信頼関係の構築を目的とし、毎月の第3日曜日に恵比寿社会教育観にて活動を行っている。

GAYA は、知的障がい者の社会教育活動支援・社会的ハンディキャップを背負った障がい者の社会参加の助成を目的としていて、障がい者とボランティアの人間の成長、相互理解・信頼関係の構築などを図る、毎月第一日曜日に活動が行われる教室である。

【活動目的】

福祉に興味を持つ青学生にボランティアを提供するということを目的とし、渋谷区の福祉施設での福祉ボランティア活動に学生を派遣した。今年度は、主に、月に1度のペースで定期的に活動の行われている二つの福祉ボランティアに学生を派遣した。

【えびす青年教室】

参加ボランティアと、学級生（知的障がい者）は、それぞれ、カフェクラブ・さうんどクラブ・せいさくクラブ・けんこうクラブの4つのクラブに属し、午前に料理やスポーツ、工作やダンスを、学級生とボランティアと運営委員が協力して行い、午後の集会でその日の成果を発表、報告した。

9月には、午前中にけんこうクラブは野菜ジュース作りを、サウンドクラブでは映画「マンマ・ミーア」の鑑賞会を、カフェクラブではマフィン作りを、そしてせいさくクラブでは、午後からの全体イベント「天下一華道会」の準備を行った。

10月には、ユニホック大会があり、学級生とボランティアが6つのチームに分かれ総当たり戦を行った（ユニホックとは、ホッケーと同じようにスティックとボールを用い、相手チームのゴールにスティックを使い、ボールをシュートして得点を競うスポーツのこと）。また、12月になるとクリスマス会があり、普段行っているそれぞれのクラブのテーマに沿った活動だけではなく、季節ごとのイベントも企画されている。様々な活動を通じ、学級生とボランティアがコミュニケーションを取ることが出来た。

【GAYA】

5月から11月の活動では、利用者の方々とボランティアスタッフが4つのグループのいずれかに所属する。その中から3グループが月代わりで料理と工作、運動を行った。料理では、オリジナルのどら焼きやカレーを作り、工作では、万華鏡と缶バッジ、英字新聞を使ったコラージュのバッグ製作、そして運動では、CMでおなじみの曲や昔なつかしの曲を流

してストレッチやダンスをした。それぞれの活動を終わると、全員が集まり外部の団体による演奏を聴き、グループごとに活動内容の発表を行った。また12月には、利用者全員が集まったクリスマスパーティーなど、月ごとに季節にあった活動が考えられており、さまざまな体験をすることができる。活動を通して利用者の方々がたくさんの人と交流できる場が提供されている。

【参加者の声】

＜えびす青年教室＞

○参加する前は、不安な気持ちがあったが、参加してみると、楽しい、と思えるようになり、充実した時間を過ごすことが出来た。

（国際政治経済学部1年）

○知的障がいをもった方に、自分が受け入れてもらえるか不安だったが、参加してみると、学級生の方も、ボランティアの方も温かく迎え入れてくれて、嬉しかった。

（文学部4年）

＜知的障害者幡ヶ谷教室＞

●知的障がいがある方々と普段関わりがなかったため、最初は接し方が分からず、少し怖いと思っていましたが、みなさん優しくしてくださり、楽しく活動できました。

（法学部1年）

●最初は、どのように動いたら良いのかわからなかったけれど、メンバー（知的障がい者の方々）の皆さんが温かく迎え入れてくださり、驚きました。

（法学部1年）

●思っていたよりも、メンバーの皆さんは素直な方が多く、話せば自分のことをわかってくれて、安心感をもてました。

（文学部3年）

【所感】

初めてボランティアに参加される方の多くは、不安や心配を持っていると思われる。しかし、この活動では、運営委員の方や、長くボランティアに携わっているベテランのボランティアの方の支えがあるので、あまり経験のない方でも参加しやすい環境が整っていた。まずは、参加することによって、知的障がいのある方と交流し、それぞれが「知的障がい」について考え、何かを参加学生に感じさせることができればと思う。日常で見かけた一面的な部分や知的障がい者に関わる機会が少ないため、先入観を持ってしまうことが多く、私自身も活動に参加する前は、不安もあった。しかし、知的障がい者の方々と関わってみると、個々が異なった性格や感情を持つように、さまざまな感情表現の方法があり、一つ一つの行動に

意味があるのだと気づかされ、知的障がい者だからといって特別な接し方をするのではなく、友達に接するように相手を尊重して関わることが大切だと感じた。

地域部では、これからもえびす青年教室・知的障害者幡ヶ谷教室に学生を派遣し、学生がこのボランティアに参加することによって、知的障がいについて考える機会となることを願う。

国際部 フィリピンプロジェクト

【活動概要】

日程：8月6日～19日(14日間)

場所：フィリピン シキホール島

参加者：ボランティア・ステーション国際部 12人(4年生1人、2年生5人、1年生6人)

現地コーディネーター：原田淑人氏

…7年間の神奈川県での小学校教諭を経て、バイルートやクウェート、オランダの日本人学校で教鞭を執る。定年退職後、フィリピン・シキホール島でコテージを経営しながら、シキホール島の子ども達の教育環境の整備など、子どものための国際協力活動に尽力しており、その献身的な活動が評価され、現在シキホール島日本親善大使を務める。通称ダーマン。

【活動目的】

①いつも机の上で教科書と鉛筆のみで勉強しているシキホール島の小学生達にエキサイティングな体験をしてもらう。そして、世界の広さや個人の持つ可能性の大きさを知ってもらう。

②海岸清掃を子ども達と行い、島の未来のためにも美しい自然を保護していくことの大切さを伝える。

【活動内容】

本プロジェクトは 2012 年度より始まり、フィリピンのシキホール島の小学校を訪問し、子ども達に日本の遊び(折り紙、大縄)やソーラン節を教えることにより、文化交流を行った。現地コーディネーターとして私達を受け入れて下さった原田淑人さんと一緒に、島の小学校を1日に3校、合計18の学校(島の小学校は全部で64校)を回り、また、子ども達との海岸清掃を行い、プロジェクトの締めでは、島の子どもたちがお互いに練習の成果を披露する場としてソーラン節大会を行った。この二つは、昨年と比べた時の今回のプロジェクトにおける大きな進展となった。

<ソーラン節>

ソーラン節大会へ向けて、各小学校でダンスの指導を行った。私たちは漁師の踊りであるソーラン節を、一つ一つ振付の意味を伝えながら、掛け声やダイナミックに踊ることをポイントに教えた。ある程度踊りが完成している学校、まだ出演メンバーも決まっていない学校等様々であったが、スタッフは見本として前で踊る班と子ども達に細かいアドバイスをする班に分かれ、できていない子には声を掛けて一緒になって練習した。印象的だったのは、

一生懸命に踊る子ども達の姿である。私達も教える側として子ども達の見本となり、また、大会で披露するため、活動から宿に帰ったあとも練習に励んだ。

＜ソーラン節大会＞

8月17日、日本文化を通じた地域コミュニティの形成と現地の若者同士の交流を目的としてソーラン節大会を行った。この大会は、2012年度のプロジェクトの開始時からの原田さんと私達の念願であったが、小学校関係者並びに現地 NGO の方々の協力もあり、今回ついに実現させることが出来た。私達はこの大会のために2週間島中を回り、小学生たちにソーラン節を教えた。この大会には、24の小学校が参加した。各学校が12人(男女6人ずつ)のチームを編成し、288人の小学生が踊りを披露した。他にも教員や保護者、地元の高校生などを含めると会場には約350人もの人々が集まり、島全体を巻き込んだ非常に大規模な大会となった。

審査員は原田先生と後援のロータリークラブの方1名、青学生3人で務めた。レベルの高い素晴らしいパフォーマンスばかりで、審査は困難を極めました。ファイナルの審査には教員6名も加わり、投票によって優勝校を決めた。優勝校にはコンピューターと3000ペソ(約6900円)、2位にはテレビと2000ペソ(約4600円)、3位には音楽機器と1000ペソ(約2300円)が賞品として贈られた。どれも現地にとっては高価なもので小学校に設置されていないものばかりで、小学生や教員の方々は皆、心から喜んでいて。私達青学生は、大会の準備や運営を手伝っただけでなく、最後に青山学院大学ボランティア・ステーション特製のハッピを着てソーラン節を踊った。どの学校にも衣装は演出にこだわりがあり、それぞれの個性が際だった素晴らしいパフォーマンスで、何より彼らの努力や一生懸命な練習の成果が感じられた。この大会の参加校のほとんどは私達が訪問した小学校であり、私達は子ども達との再会を果たし、彼らの溢れる笑顔から一人一人の頑張りや熱意を肌で感じる事ができた。

＜折り紙＞

訪問した小学校で、子ども達に日本の代表的な遊びである折り紙を教えた。作ったのは、主に紙飛行機、兜、犬の三種類で、私達ボランティアメンバーが子ども達一人ずつに折り紙を配ると、これから何をするんだろうとキラキラした目でこちらを見てくれたことがとても印象的だった。まず犬を作り、ボールペンなどを使って作った犬に顔を書き、その次に兜を作って犬に被せました。折り紙のサイズだと実際に自分の頭に被せることができないので、代わりに犬に被せて“これは帽子なんだよ”と教えることにしたのである。兜と犬を合体させて自分が何を作ったのかわかった時の子ども達の笑顔はとても嬉しそうで、子ども達も私達も一緒に盛り上がる事ができた。折り紙と一緒に作るだけで子ども達がこんなにも喜んでくれて、教えた私達もとても幸せな気分になれた。最後に紙飛行機を作って、教室の中で作った飛行機を使った的あてゲームを行ったり、外に出て一緒に飛行機を飛ばしたりして遊び、交流を深めた。

＜大縄＞

小学校を訪問する際に大縄を持参し、大縄跳びを子どもたちに教えた。日本で育った私達にとって大縄跳びは身近な遊びであるが、フィリピンの子どもにとっては異文化の遊びなので刺激的な体験になったようで、目を輝かせて楽しんできた。これからも子ども達が大縄を楽しめるように、大縄を各訪問校に寄付した。その時、子どもたちは笑顔で、“ありがとう”と言ってくれた。小学生の時、多くの日本人もより良い記録を出すために、クラス一丸となって大縄を跳んだ記憶があると思うが、フィリピンの子ども達もお互いにコツを教え合うなど、クラス一丸となって取り組んでくれた。大縄跳びでしか味わえない独特の一体感により、子ども達の繋がりが強くなったのではないだろうか。

＜海岸清掃＞

海岸清掃は今回新しく取り入れた、海岸でゴミ拾いをする活動である。二つの小学校で上級生と共にいった。シキホール島は海の綺麗な島で、今後は自然を活かした観光産業で発展していくことが見込まれている。この島の未来のために、子ども達に島の自然を保護していくことの大切さを伝えることが海岸清掃の目的である。このような島の未来のためになる活動を通し、フィリピンプロジェクトに文化交流以外の新しい意味を見出すことが出来た。

始めに原田さんから子ども達に、美しい海を見るために島には多くの外国人観光客が訪れていること、もし観光客が途絶えたら島の産業が成り立たないことについてわかりやすく説明していただいた。私たちは木や石などの自然のものは捨てずプラスチックゴミのみを集めることを子ども達に教えながら、お手本になるべくゴミ拾いをした。子ども達はかなり一生懸命に拾い集めてくれて、約 10 枚用意したゴミ袋はあっという間にいっぱいになった。

一つ印象的なエピソードを紹介すると、一人の女の子に「今日だけでなく、いつでもビーチをきれいにしておくんだよ！」と言いつつ、その子は「わかった！綺麗にしておくから、またビーチを見にこの島に来てね！そしたらまた会おう！」と答えてくれた。

【今後の展望】

私たちは一度原田先生に、原田先生自身が考えるシキホール島の貧困、教育などにおける問題についてお話を伺う機会を頂いた。原田先生は、日本のボランティアが一度きりの支援で満足してしまうことを残念に思っており、継続的な支援でなければ実を結ばないと仰っていた。私たちは一度だけの支援で終わらせるつもりはない。まず、来年の現地での活動がより多くの人のためになるよう、ボランティアとしての質を上げることを目指す。そのために、シキホール島の問題を理解し、人々のニーズに合わせて何をどのようにすべきかを考え、それに加え、日本にいる間も私達ができる最大限の活動を行うことも考えている。これは企画を練っている段階であるが、物資や資金の寄贈などを考えている。フィリピンプロジェクトは今回で 2 年目の新しいものなので、改善の余地は多くある。今回の活動の反省点を来

年の活動では改善すると共に、新しい活動にも挑戦していきたい。

【参加者の感想】

私の中で一番印象に残っているのは子ども達の様子です。私達が学校を訪れると教室から出てきてとても嬉しそうに出迎えてくれました。折り紙等を教え始める前には、これから何が始まるのかキラキラした目で私達を見つめてくれました。カメラを向ければかわいい笑顔を向けてくれ、とても素直な子達だと強く感じました。そんな子ども達ですが、彼らは皆細く華奢な体格をしていました。お弁当のおかずは極僅か。ご飯だけではやはり栄養が足りません。日本にいては気付けない境遇の差を感じさせられました。また、学校の設備が本当に限られていて、校庭には遊具と呼べるものはほとんどなく、日本では当たり前のようにある理科や音楽等の授業のための備品はほとんど備えられていませんでした。

私達にでも出来るのではないかと思ったことは、寄付を募り、そのお金で備品等を送ることです。このことにより、僅かでもシキホールの子ども達がより楽しく学校生活を送れるための手助けができれば良いと思います。

(1年 安藤彩夏)

決して便利とはいえない環境の中でも、希望を失わずに笑顔の絶えない子ども達と触れ合い、この子達の将来のために自分はどのように役に立てるかを考えさせられました。今後也会った人達との繋がりを一度きりで終わらせずに、自分にできることを探していきたいです。

(2年 上田萌々子)

日本の文化やコミュニケーションを通じて子ども達と触れ合い、日本の良さを伝えることが出来ました。そして沢山の元気を貰いました。フィリピンの厳しい現状も見直すことができ、大変有意義な二週間でした。

(2年 梶田沙央理)

子ども達の笑顔が印象的でした。私達がやることは規模も小さいので、実際に為になっているのか分かりません。しかし、あの笑顔が忘れられません。実際に行き、活動するのをやめてはいけなかったと思います。彼らのために他にも何かをしてあげたいと思いました。

(1年 久保田麻友)

一言で言うと良い経験になりました。汗をかきながら子ども達と一緒に縄跳びをしたことや、紙飛行機を作り、みんなで一斉に飛ばしたりしたこと等旅行では味わえない経験が出来ました。今回参加できてとても良かったです。

(2年 鈴木絵里)

私の現地に行く前のシキホールに対するイメージはストリートチルドレンに溢れた貧しい島でした。そのため、寄贈等の支援を行うボランティアをすればいいと考えていました。しかし行ってみるとストリートチルドレン等一人もなく、現地の人達は貧しいながらも力強く生きていて、皆とても暖かい人たちでした。

活動で現地の小学校を回っていく中で大変だと感じたのは、相手とに意思疎通が図れないことです。お互いに英語を完璧に話せるわけではないので、例えば折り紙を教える時にする細かい指示が伝わらなかったりして苦労しました。伝わらないことに苦労しながら折り紙を教えていった中で印象深いクラスがありました。そのクラスには片腕が不自由な子どもがいて、折り紙の細かいところが折れなくて困っていました。その彼を見て周りのクラスメートが手伝ったのですが、全てを手伝うのではなく、少しだけ手伝って、残りのできる部分を彼にやらせていたのがとても印象に残りました。シキホールの子どもの暖かさを感じただけでなく、ボランティアにおける価値観も少し変わりました。相手が困っていたら全てを支援するのではなく、相手のニーズに合わせ、相手の成長に繋がるようなボランティアをこれからしていくべきなのではないかと考えさせられました。

私達がシキホールに対してできることははっきりいって少ないと思います。なぜなら、生活に最低限必要な衣・食・住のすべてが貧しいながらも足りているからです。しかし何もなくて良いわけではないと考えます。シキホールという島は交通が不便で、かつ、インターネットの環境が不十分なため、そこに住む人々は他の国や他の世界についてほとんど知りません。グローバル化が進む世界でこうになってしまうのは今後のシキホールのことを考えると良くないと思いました。なので、今後私はシキホールの子子ども達に日本及び海外の文化等について交流を通じて教える、ないしは興味を持たせるような活動をしていきたいです。

(1年 鈴木紫苑)

元気を与えるための活動なはずなのに、明るい子ども達から、優しい島民の皆さんから、豊かな自然から、いつの間にか元気を貰っていました。加えて、ボランティアとは何なのかについて深く考える良い機会になりました。

(4 年 徳永安恵奈)

最初の頃は、私達が今回行った活動は、その場で何らかの成果を求めるものではない、とどこか諦めのような気持ちを持っていました。しかし、島の未来を担う子ども達の将来に、このボランティアが何らかの影響を与えるものであると、成功を修めたソーラン節大会や活動を通じて痛感しました。たとえそれが今は目に見えない成果だとしても、これからもフィリピンの子どもの達の刺激になるような異文化交流、また教育活動を行っていきたいと考えるようになりました。

シキホール島の先生が言って下さった、「子ども達は何でも吸収するわ。あなたがもし教えることが好きなら、あなたが将来教師になることはとても幸せなことよ。」という言葉に、自分の将来の夢に向けて背中を押された気持ちになりました。このボランティアで得たものは本当に大きいものでした。

(2 年 西部葉月)

私が今回プロジェクトで印象に残っているのは、フィリピンの人達の笑顔との温かさです。訪問する学校全ての子ども達と先生方に笑顔で迎えて頂き、子ども達は私たちがする全てのことに興味津々でした。私が散歩をしていると、学校で会った女の子に「あやめー！」と声を掛けられてとても嬉しかったのを覚えています。ダーマンのシキホール島での活動の土台がなければ決して実現できないプロジェクトです。とても感謝していますし、同じ日本人として心から慕われているダーマンを誇りに思いました。

(2 年 二宮彩芽)

子ども達とのふれあいから、一人一人の溢れんばかりの笑顔に励まされ、元気をもらい、自分自身を見つめ直すことが出来た素晴らしい 2 週間でした。この経験をここで終わらせることなく、自分が見て感じたことをこれからも発信し続けたいと思います。

(1 年 橋本佳奈)

私は現地に行くまでボランティアのゴールが分かりませんでした。しかし、現地で活動するうちにボランティアに決まった形などなく、人のためになればいいと気づきました。これから様々な可能性を模索し、効果的なボランティアをしようと思います。

(1年 三崎秋人)

子ども達の笑顔、最高でした！たくさんの笑顔を見ることができ、このプロジェクトを行う意味を多くの場面で噛み締めました。その中でも海岸清掃はやった甲斐が特にあったと思います。“もっともっと多くの小学生と一緒に海岸清掃を行い、シキホール島の素晴らしい自然を保護することの大切さを伝えたい”と強く感じました。また、子ども達を笑顔にできる遊びはソーラン節・大縄・折り紙以外にもたくさんあると思います。もっと多くの遊びを子ども達に教え楽しませてあげたいです。そのために、このフィリピンプロジェクトを絶対に継続させるという私の今後の目標が出来ました。これからの1年間、プロジェクトを継続させ、より充実した内容にするために私は全力を尽くします。長期的には、このプロジェクトをシキホール島以外にも拡大させ、世界中の子ども達を笑顔にしたいです。

(1年 谷田部悠亜)

世界食糧デー

国際政治経済学部1年 清水 瞳

【活動期間】

2013年10月15～16日 計2日

【活動場所】

青山学院大学 17号館エントランス・学食(15日)

マイケル・コース表参道店(16日)

(当初の予定では、15・16日と2日かけて大学構内で活動する予定だったが、台風による天候不順により16日の構内での活動は中止となった。)

【活動目的】

「飢餓のない世界」を目標とし、活動するWFPと、WFPと長期的パートナーシップを結び飢餓撲滅を目指すファッションブランド「マイケル・コース」と共に、青学生として「飢餓のない世界」の為にできることを考え、実行する。

【活動内容】

10月16日は、国連の定める、世界の食糧問題について考えるための「世界食糧デー」である。

世界食糧デーの認知の為、マイケル・コースは当日(16日)世界5都市でイベントを行った。

イベントの内容は、マイケル・コースの特別Tシャツを店頭にて無料で配布、同店店内にて着用した写真を撮影、SNSで拡散さらに世界中から集まった写真の一部をニューヨークのタイムズスクエアの電光掲示板に映すというものである。

青山学院大学は、WFPの活動、またそれを応援するマイケル・コースがイベントを行う意図に賛同し、このイベントの宣伝活動を行った。この大学の意向を受け、学生としてできることは何かと考えた時に、「学生を巻き込む」ことを目的として活動しているボランティア・ステーションも青学生を対象とした宣伝活動に協力できるのではないかと考えた。



配布したTシャツ

そこで、世界食糧デー当日多くの青学生にこのイベントに参加してもらえるよう、また、世界食糧デーの認知及び世界の食糧問題について学生に考えてもらえるよう、イベント前日、15日の昼休みに17号館エントランス及び17号館学食でイベント概要を掲載した宣伝カードを配布した。活動中には、WFPの方のご協力で、世界の食糧事情に関しての大型看板を設置し、視覚的にも食糧問題への認知に努めた。また、世界食糧デー当日には、スタッフがマイケル・コース表参道店にて実際にこのイベントに参加した。

【スタッフ所感】

世界の食糧問題について、誰もが一度は聞いたことがあっても、真剣に考えたことは余りないのではないだろうか。

世界的に有名なブランドが率先して啓蒙活動を行うこと、またその企画に参加することで、食糧問題を身近に感じることができるのではないかと思う。地球市民として生きていかなければならない私達にとって、飢餓は常に考えなければいけない問題である。しかし、問題は大きすぎて、学生が解決できるようなものではない。だが、解決はできなくても、食糧問題について意識し、自分が世界の大きな問題に対しどうアプローチすればいいのか考えることはできる。それに気づいてもらえるように働きかけるのがボランティア・ステーションの役割だと思う。

前日 15 日に配布した宣伝カードは、当初の予定よりも早く配布終了した。カードを受け取った学生からは、どのようなイベントなのか、WFP とは何か等の質問を受けることもあった。

イベント当日も、マイケル・コースの店舗へ出向き、“WATCH HUNGER STOP”と書かれた T シャツ姿で写真を撮る青学生が多く見られた。これは、青学生に世界食糧問題への興味を持ってもらえた結果だと思う。

【今後の展望】

さらに食糧問題について青学生に知ってもらえるよう、今回の企画でお世話になった WFP の職員の方をゲストにお迎えする講演会を開催したい。

伊豆大島台風 26 号災害ボランティア

教育人間科学部教育学科 1 年 松村悠太郎

【活動場所】

東京都大島町元町地区

【活動期間】

11 月 1 日（金）

【参加者数】

ボランティア・ステーションスタッフ 8 名

【活動目的】

10 月 16 日に伊豆大島を襲った台風 26 号によって甚大な被害を受けた地区に、ボランティアとして参加することで、現地がいち早く復旧するための支援を行う。また、ボランティア・ステーションの理念のもとに、災害ボランティアを経験することでコーディネーターの育成を目指す。

【活動内容】

現地は台風で生じた土砂崩れによって、局地的に大きな被害を受けていた。この活動を行うことになったきっかけは、岩手県宮古市中心に震災の支援活動を行っている青山学院女子短期大学の吉岡先生に声をかけていただいたことである。現地での活動は大島社会福祉協議会が地区のボランティアセンターの役割を担っており、その指示に従って行った。島に到着した時間が遅かったため、午前中はボランティアセンターに運ばれてくる機材や道具の整理作業を行った。午後からはボランティアセンターの指示のもと、一軒の民家に入って、土砂崩れによって流れてきた土砂の撤去作業を行った。スコップを使い、土砂をもとあった高さになるように取り、その土砂を土嚢に入れて積むという作業を行った。

【スタッフ所感】

台風 26 号の被害は局地的であるが、島であるため被害はとても大きいと見受けられた。家屋の全壊が見られる地域、行方不明の方々がいる地域では自衛隊が重機を用いて、活動を行っていた。今回、私たちが活動できたのは午後だけだったため、現地の方にお話を伺うことや、今後に必要なものを把握することがあまでしなかった。また、今回 AGU-VS スタッフ 8 名と他のボランティア方 3 名で活動を行ったがこの人数を擁しても、作業が格段に進んだようには思えなかったし、肉体的に大変な作業であった。現在は、東京から多くのボラ

ンティアが訪れて活動を行っているものの、今後は現地の方々が中心となって復興に向けて動かなくてはならない。そういった意味で今後はハード面から心理的な支援であるソフト面への転換が必要だと考えられる。

【今後の展望】

ボランティアのニーズの転換として、一時的に活動を終えるのではなく、今後変わりうるニーズに応じて、活動を転換させていく必要があると考えている。現在、ボランティア・ステーション地域部が企画に乗り出し、3月に現地を視察予定である。アクセスの面から考えても、離島ではあるが同じ東京都であるため、訪れやすいと思われる。その中で、大学生が行うことのできるサポートをできたら本望である。また、このような甚大な台風の被害というのは今後私たちにも起こりうる災害のひとつであることから、その際に対処できるような知識を身に着けて、災害時に役立たせるようにすることも求められていると思う。

2013 年度青山祭 ～出店～

青山祭 出店リーダー

国際政治経済学部国際政治学科 2 年 米澤理音

【活動場所】

青山キャンパス 15 号館の正面、中庭ステージの真横に出店

【活動期間】

2013 年 11 月 1 日(金)～3 日(日)

【活動目的】

宮城県石巻市の有名な B 級グルメである石巻焼きそばをアレンジした石巻焼きそばパンと、売上げの一部が東日本大震災の復興支援となる「がんばろう日本！サイダー」を販売することで来場者へボランティア・ステーションの存在を知ってもらい、またボランティアに興味を持ってもらえるような活動を目指す。

【活動内容】

石巻焼きそばパンの調理・販売と「がんばろう日本！サイダー」の販売。および来場者へのボランティア・ステーションの宣伝。

【リーダー所感】

青山祭三日間ともにスタッフはみな精力的に、販売や宣伝、調理などそれぞれの役割を果たしていた。朝から自主的に集まり、夜遅くまで残って活動したスタッフもあり、改めて仲間の大切さや人の優しさを実感することができた。

一日目と二日目は、なかなか売れ行きが伸びなかったが、三日目に天候も味方して、サイダーは完売し、焼きそばパンも目標の 600 食には届かなかったが、560 食ほど販売出来た。また、看板を持って宣伝することが効果的で多くのお客さんが集まって下さった。

中庭ステージのイベント「World Record Challenge ～世界一に俺になる！？～」に出場したスタッフはそれぞれ馬跳びとバスケット・オン・ザ・ヘッドの世界記録に挑戦した。そして、七号館前のステージ企画「ONE MINUTE BATTLE～60 秒で夢をつかめ～」という、アメリカの TV 番組をもとにした、ミニゲームに挑戦する企画でもスタッフが活躍し、みごと優勝を果たすことが出来た。このように出店だけではなく、青山祭を積極的に盛り上げ、多くの人にボランティア・ステーションの存在をより身近に感じて頂けたのではないかと思う。

出店にいらしたお客さんの中には、何度かボランティア・ステーションの活動について質問をくださる方もいた。私たちの活動に興味や共感を持って頂けて、とても嬉しく感じた。

スタッフ同士の絆や連帯感が深まることは重要であるが、青山祭は普段はなかなか関わる
ことのできない外部の方々と交流し、親睦を深めることができる機会でもある。今回の青山
祭で、少しでも多くの方に私たちの活動を知って頂き、そして“楽しそう” “自分も何かし
たい” 思ってもらえたのなら幸いである。

2013 年度青山祭 ～教室展示～

青山祭 教室展示リーダー

国際政治経済学部国際コミュニケーション学科 1 年 丸山万里枝

【活動場所】

17 号館 4 階 17402 教室

【活動期間】

2013 年 11 月 1 日(金)～3 日(日)

【活動目的】

テーマを”笑顔展”とし、現地の方々のたくさんの笑顔を伝える。

ボランティア・ステーションの存在を知ってもらう。

ボランティア活動ならびに各地域に興味を持ってもらえるようにする。

【活動内容】

現地の方々やスタッフのたくさんの”笑顔”の写真を展示した。

また、東北部と国際部は今年度の夏期活動について、地域部は前期に行った活動について、プロジェクトごとに活動報告や紹介を模造紙にて展示した。展示内容をもとに各部ごとに 2 問ずつクイズを出題し、クイズかアンケートどちらかに答えて下さった方には、出店で使用出来る大盛りサービス券を配布した。

更に、各部ごとに活動中の写真をスライドにした動画を流したほか、資料として塩竈市の観光パンフレットや過去の活動報告書の閲覧、各部一人ずつにボランティアを通しての体験談を書いて貰い、それをまとめた新聞を配布した。

【リーダー所感】

今年度初めての教室展示という試みであったため、来場者にどんなことを伝え、何を感じて欲しいのか、など一から考えていった末、”笑顔”をテーマにすることにした。

初めてにも関わらず、3 日間を通して 300 人以上の方が来て下さり、予想以上の人数に感動した。また、報告をじっくり読んでその場で感想を言って下さる方や、自分もこんなボランティアをしている、と話して下さる方もいた。

他大学でボランティア団体に所属されている学生も来場して下さり、地域部のような知的障がい者の方々と関わる活動や、渋谷区清掃活動といった活動をこれから自分たちがしていくために当スタッフの話を聞きたいと言って下さった。他にも高校生や、小さなお子様を連れてご家族など、様々な世代の方が展示を見に来て下さった。そんな多くの方々の中でも、石巻市出身で現在避難生活をされている女性が印象的だった。自分の故郷を懐かしそう

に思い返すその方の笑顔に、こちらの方が元気をもらった気がした。

この活動報告を通して、ボランティアの経験がある方にとっては、より興味・関心を持って頂けたと思う。また経験のない方にとっても、少しでもボランティアに興味を持ち、現地の魅力を知る機会になったのではないか。また、この展示で興味を持ち、今後ボランティアを始めるきっかけやその地域に行くきっかけになればと思う。さらに、この展示で、ボランティア・ステーションの名前を知っていただく機会にもなったはずだ。

3日間ずっと思っていたのは、来場者の方にもスタッフにもまずは楽しんでほしい、ということである。同じようにボランティアをする学生や団体の方々にボランティア・ステーションの名前を認識して頂くことで人と人の輪を広げ、多くの方々と協力して活動の幅を広げられたらと思う。そして、何より、ボランティアに興味があっても一歩を踏み出せない方、学生がどのようにボランティアを進めていくのか知りたい方、現地の様子を深く知りたい方など、多くの方々にボランティアを始めるきっかけを提供していきたい。“楽しむ”気持ちを大切に、来年度も笑顔あふれる展示をしていきたいと思う。

フィリピン台風救援金

国際政治経済学部 国際政治学科 1年 川上渚紗

【活動期間】

12月2日～12月23日 12時40分～13時10分（昼休み）

【活動場所】

（メインストリート、17号館入口前）

【活動目的】

ボランティア・ステーション国際部が中心となり、フィリピンを襲った台風30号によって甚大な被害を受けた方々へ自分たちのできる支援として募金活動を行う。また青山学院大学の学生や教職員に、フィリピン台風の被害について知ってもらい、日本にいながらできる支援への関心を持ってもらう。

【活動内容】

11月8日にフィリピンを襲った、台風30号の甚大な被害からの復興のために、学生・教職員を対象に募金活動を行った。集まった救援金は日本赤十字社へ送金されており、保健医療チームの活動費、物資支援等に使用されることになる。また立て看板の設置、チラシ配布による宣伝のほか、さらに Facebook、Twitter による宣伝・報告を行った。

そして、高知大学や大阪市立大学などとフィリピン支援全国大学グループを結成し、Facebook 上で募金活動の様子などを共有した。

12月23日までの16日間の募金総額は86,393円であった。

【参加スタッフの感想】

・今回のフィリピン台風救援金はボランティア・ステーションとして初めて行った募金活動であったため、どうしたら一番効果的な募金活動を行えるのかということがわからず苦労した。より効果的な募金活動にするため、ボランティア・ステーション内にいる募金活動の経験者からアドバイスをもらう、活動を行う人に裁量を与える、SNSの活用などの工夫をした。募金を行う中で、ボランティア・ステーションの力、人の善意という大きな力を実感することができた。（経営学科2年）

・事前の準備で苦労したことは、現地の情報の収集である。インフラが壊滅したこともあり、現地では今もなお物資を届けるのが困難であり、被害情報がうまく伝わってこないからである。募金を呼びかける上で工夫したことは、大きな声を出すことである。恥ずかしがら

ずに声を出すことで多くの人々に訴えかけることが出来るのは間違いないと思う。(英米文学科2年)

【スタッフ所感】

募金活動は、呼びかけ方が重要になると感じた。募金する方はその募金がきちんと現地に届くという確信を得られなければ、募金をしようと考えないだろう。信頼を得るためには、現地での被害状況はもちろん、自分たちの団体名、募金の使用目的など信頼を得る情報を呼びかけることが必要だ。実際に、支援先はどこなのかと尋ねてから募金をしてくださる方もいた。募金活動は信頼のもと成り立っていることを感じた。

また私たちができることはほんの少しだが、青学の中で募金を呼びかけ、現地の甚大な被害状況を訴えることで、青学生や教職員の方々に関心をよせてもらうことができたと思う。しかしそれだけではなく、スタッフにおける、フィリピンの被害状況への関心や、募金活動をより良くしていこうとする意欲が見られる活動となった。呼びかけ方やスタッフの配置、募金活動の場所、時間などについて日を重ねるごとに反省点が挙げられた。例えば初日の反省を生かし、情報の統一や呼びかけの補佐として、募金箱・手持ち看板にカンペを貼ったり、積極的に声を出して呼びかけたりして、改善を図った。より多くの人に募金してもらうために、今後も改善していくことが必要であると感じた。

【今後の展望】

今年度は募金活動を続けていきたいと考えているので、多くの人に募金を身近に感じてもらうために、さらなる改善をしていく。2月1日現在ではチラシの内容の更新を行っており、募金箱を大学購買会内に設置して継続的に活動が行えるよう企画を進めている。

卒業学年報告～ボランティア・ステーションでの活動を通して～

【私だからできること】

「ボランティアに来てくれてありがとう。でもこんな汚くなってしまった町に誰がこれから来てくれるんだろう。私たちに未来は無い。」

これは2011年4月に東日本大震災復興のボランティアとして、私が泥かきにお邪魔したお宅のおばあさんが言われた言葉です。ボランティアとして泥まみれになりながら懸命に頑張った私でしたが、自分の力不足で現地の方々を直接助けることはできませんでした。

東北から東京に帰り、東北のために「私にできること、私だからできること」を探しているときに大学からボランティア・ステーションのお話を聞かせて頂きました。「ボランティア経験者として、そして大学生として、自分の周りにいる大学生を東北に安心して連れて行くこと」が当時の私にできることではと考え、ボランティア・ステーションに入り、初代代表を2011年から1年間勤めさせて頂きました。大学関係者、青学生やOB・OG、NGOの方々、そして毎日議論を交わしたボランティア・ステーションの仲間達の助けがあり、結果1年間で600人以上の青学生にボランティアに参加してもらうことができました。ボランティア・ステーションは「私だからできること」を最大限以上に実現させてくれた場所でした。

私は今春から医療関係の仕事に従事します。専門分野の勉強が必要とされる仕事ですが、「私だからできること」を更に増やすことで、人々をハッピーにできると考えたため入社を決意しました。世界には医療が行き届かない人たちが多くいます。専門知識と留学で培った英語で、その人たちが少しでも幸せに、そして未来が切り開ける様に心掛けながら仕事がしたいです。

2011年度青山学院大学ボランティア・ステーション代表

法学部法学科4年 荻原 渉

【ボランティア・ステーションでの活動を振り返って】

私は2011年の夏休みに一般学生の参加者としてボランティア・ステーションが主催する石巻市ことぶき商店街復旧ボランティアに参加しました。生で見る東北地方の現状は私にとってあまりにも衝撃的でした。あまりの被害の甚大さに心が痛み、自分の無力さを感じました。そんな時に自宅が被災した方とお話しをする機会があり、その方から「今回の震災で得た教訓をあなたたちの世代に生かしてってください」と声をかけていただいたことが忘れられず、「自分も東北のために何かアクションを起こしたい!」と思い、ボランティア・ステーションのスタッフとなりました。

私が約2年半のボランティア・ステーションでの活動で大切なことだと感じたことは、「人は1人では生きていけない」ということです。現地でボランティア活動を行うなかで、「自分1人では何もできない」と自分の無力さに苛まれることが多々ありましたが、本当に現地の方々のエネルギーというのは物凄くて、悲しみ、つらさを抱えながらも前に進もうとする力に、こちらが明るさや元気を届けるつもりが逆に勇気をもらっていました。人1人ではなかなか出来ることというのは限られていますが、月並みではありますが、人が協力し合い、励ましあい、思いを1つにした時、とてつもないエネルギーになるのではないのでしょうか?そんなことを感じながらボランティア活動を行ってきました。普段自分が生きていられるのは本当に多くの方々の支えがあってこそなんだと、普段何気なく受けている人の好意や思いやりに感謝しようと思いました。そして自分も人に対して優しさや温かさを与えられる人間になろうと強く感じました。これから社会人となるわけですが、ボラステで得たこの貴重な教訓を胸に温かく、華のある人間になりたいと思います。そして2年半の活動で出会った全ての人達に心から感謝します。本当にありがとうございました。

文学部フランス文学科4年 菅野大樹

私がボランティア・ステーションに関わり始めたのは震災から1年が経過しようとしていた時でした。ずっと実行できずにいた「被災地のために何かしたい」という気持ちを具現化すべく参加を決めました。初めて石巻に行った時のことは今でもはっきりと覚えています。何もないのです。初めから何もなかったかのように。人々が生活していた痕跡もないほどに。被害の大きさを実感しました。

私が携わったのは、「ボランティア」という単語から想像しにくい、目に見えないソフト面での支援であるスタディ・ツアーの企画だったため、特に二年目の活動ではとても苦労しました。「ボランティア」とは何か、学生に出来ることは何か、自分たちの活動は被災地のためになっているのか、自分がしたいことは何か。悩みが絶えませんでした。それでも二年間、関わり続けられたのは石巻の方々のおかげです。訪れる度によく来たねえ、と迎え入れてくれ、震災の話、歴史の話、普段の話、本当に沢山のことを話してくださいました。みなさんに「来てくれてありがとう」と言われる度に、毎回お世話になってばかりで何も力になっていないことを申し訳なく感じていました。それでも毎回笑顔で迎えてくれる石巻の方々の存在は、私の活力源であり、現在の私にとって石巻は「被災地」というよりも「大好きな人がいる大好きな場所」になっています。

また、いつも暴走する私を支えてくれたチームのメンバーにも感謝の気持ちでいっぱいです。最高の先輩、同期、後輩がいなければ何もできませんでした。本当にありがとう。

実のところ、現在の石巻の風景は初めて見た時からあまり変わっていません。復興も復興もまだまだこれからなのです。今まで、石巻のために「何か」出来たかわかりませんが、大好きな場所の、大好きな人たちの力に少しでもなれるように、復興のお手伝いが出来るように、これからもずっとずっと訪れ続けます。

法学部法学科4年 京極伽乃

私は、大学2年時から地域部に所属していた。主な活動内容は、被災地への学習支援や知的障がい者の余暇支援などである。私はそれらの活動を通して得た、主に2つのことを今後大切にしていきたい。

1つめは、震災を風化させてはいけないこと。私が陸前高田市にある、特に被害の大きかった建物を訪れた時に、ある男性に出会った。その男性は中年で、一人でその建物にやってきた。建物の前で手を合わせゆっくりと目を閉じたかと思うと、人目も憚らずに号泣した。私はその時、テレビでは感じるることのできない被災者の叫びを聞いた気がした。そして同時に、被災地の状況、被災者の声を語り継ぐ必要を感じた。

また、被災者の女性から、「(東京に) 帰ったら、私たちがどんなに大変かを伝えるより、こうやって元気に頑張っていることを伝えてね。」と笑顔で言われたことが印象に残っている。私は自身が実際に現地で感じたことを一人で消化するのではなく、周りに伝えることは私たちの義務ではないかと思う。

2つめは、目と目を合わせることの大切さ、笑顔の持つ魅力である。これらは言うまでもなく当たり前のことだと感じるかもしれない。しかし、私は活動を通して実感を伴って得ることができた。私が関わった方々は知的に障がいがあり、中には会話の難しい方も多かった。普段、私たちはコミュニケーションをとるとき、多くを言葉に頼るが、彼らと関わる際に相手の表情をよく見ることがとても多くなった。目と目を合わせ、相手が今、何を思っているのか。相手の「目を見る」ことで伝わるものの多さに気付くことができた。また、会話が難しく、感情が表出しにくい方が活動を通して見せる笑顔が、本当に輝いていて、安心感を与えるものだった。

私は4月から小学校教師となる。学び得たことをぜひ教師として生かしてきたい。私がこれから出会う子どもたちの中には3.11を経験したことのない、聞いたこともない子もいるだろう。私は子どもたちに、自身が現地で感じたことや見たことなどを語り継いで、何かを学び取ってもらいたいと強く願う。

また、顔を合わせることなくコミュニケーションが取れる時代が進む中、子どもたちに「人の目を見る」ことの大切さを伝えていきたい。そして自身が子どもたちの目を見て対話することを心掛け、笑顔を決やさず生活していきたい。

教育人間科学部教育学科4年 座間味絵里

【2年間の活動を終えて】

私は、青山学院大学ボランティア・ステーションのスタッフとして、石巻プロジェクトのメンバーとしてこの2年間活動を通して、幾度となく東北に足を運ぶ事ができました。その中で、災害支援におきまして一番大切なことは、その土地をきちんと見つめ少しずつ知っていく事、そして自分が得た知識を出来る限り伝えていく事だと学びました。

2012年夏には“石巻スタディ・ツアー”を施行いたしまして、その時の参加者の皆さんにとってもご好評を頂きました。また、石巻には伝えたいという思いを持っていらっしゃる方が多くいます。その方たちにも、『私達に発信する機会をくれてありがとう』と言って頂きました。そして、今年の春にはその時の参加者の方たち同士で再度石巻に足を運んでくれたそうです。こうして見てみると、東北の人々、青学生、我々ボランティア・ステーションの思いをこのツアーという形を持って少しでも体言化できたと思います。今年は石巻プロジェクトの夏企画の施行はありませんでしたが、私達スタッフだけでも今まで培ってきた繋がりを大切にして夏視察に行く事が出来ました。私にとって、学生生活で最も仲間と達成感を共有した時間でした。

この団体に2年間という短い時間ではありますが所属し、互いに切磋琢磨し合えた先輩、同輩、後輩たちとの時間は私の宝物です。一つの企画の為に幾度となく深夜までミーティングを重ね、試行錯誤しながら作り上げていく、このような東京での活動はとても地道でしたが、私はこの時間が楽しくて仕方ありませんでした。私はボランティア・ステーションが大好きです。後輩たちにも、様々な事を悩みながら、私と同じ気持ちで卒業して欲しいなと願っています。

私たちに、このような機会を下さった皆様に本当に感謝しております。

本当にありがとうございました。

文学部日本文学科4年 笹島百合愛

【一生の価値】

幼い頃描いていた大学生のイメージはもっとかっこいい大人でした。私はこのボランティア・ステーションという団体での活動を振り返ってみても、かっこいい大人には程遠くまだまだ子どもだと感じます。

二年生の発足時は被災地のために何かやりたいという気持ちだけが先行するだけで、右も左もわからず、ただアヒルの子のようについていっただけでした。三年生になってプログラム企画課（現渉外課）のリーダーをやらせてもらってからも、先輩方の力を借りているだけであって、私の能力不足でまだまだ子どもだと感じました。地域部のメンバーとして子ども達や障がい者の方々と一緒になって楽しんで活動している自分もまだまだ子どもだなど思ったりもして。

しかしちょっとだけ大人になったと感じる瞬間があります。活動とは関係の無いところで、街を歩いているお年寄りや体の不自由な方の手助けをしたり、震災関連のイベントに参加してみたり、考えることが楽しくて仕方なくなって、地域活性化などの様々なことを調べたりと…。本当に些細なこと。それでも今までには無かった、少し大人になった自分が今ここにいると思います。他者に満足してもらおうとする行動が、自分の成長と満足にもつながっていくボランティアの力は不思議なものだと感じます。

最後に、震災というものは風化していくことは仕方ないことなのかもしれません。忘れることが人間の最高の防衛行動でありますし。私もせっかく少し大人になったと感じたところで卒業してしまいます。もしかしたら私の心の中からも震災のことが遠のいていってしまうかもしれません。しかし、ふとした時に震災のことや地域の実情に関する情報などを耳にしたら、何か行動を起こしたいと思う気持ちになるのは間違いないでしょう。そんな一生分の価値を体験させていただいたボランティア・ステーションという環境に本当に感謝をしています。

法学部法学科4年 其部光

私は AGU-VS の活動で、岩手県陸前高田プロジェクトのコーディネーターを務め、写真救済活動を中心に仮設住宅に住む子ども達への教育活動や知的障がい者施設における活動に携わりました。写真救済活動に関しては、青山・相模原キャンパスにおいても写真洗浄活動を行い、多くの学生に参加してもらうことができました。

このように様々な活動に関わったことからチームプロジェクトの難しさやボランティアに携わる喜びなど多くのことを学ばせてもらった一方で、特に痛感したことはボランティアの限界です。ボランティア活動は現地のニーズにあわせたものを企画、運営しますが、被災地を見たり現地に住む方々とお話しをしたりする中で、日本の防災、減災対策の仕組みへの興味が広がりました。なぜここまで被害が拡大してしまったのか、もっと効率的な情報伝達手段や対策があったのではないかなど様々な疑問や考えを持つきっかけとなり、被災地へのアプローチの仕方に違和感を覚え、今後災害対策に関わる勉強や仕事をしたいと感じることもありました。

結果として私は AGU-VS の活動を通してボランティア活動とは別の道に進むことになりましたが、この経験が現在の自分の礎になっていると確信しています。今後、学生時代と比較し社会人になればボランティアや被災地に直接的に関わる機会はどうしても減ることでしょう。来年度から働かせていただく会社でも災害対策の分野に希望を出していますが、希望通りになるとも限りません。しかし、AGU-VS での活動で得た初心を忘れずに、人間として、また、社会人としての自己成長に繋げていきたいと思っています。

社会情報学部 社会情報学科 4 年 高橋真未

【これまでの活動を振り返って】

ボランティア・ステーションでの活動を振り返ってみると、本当にあっという間に時間が過ぎ去っていきました。

震災直後、塚本先生の呼びかけから始まったボランティア・ステーション。4月に視察に行った多賀城の状況は悲惨でした。しかしそれから、みるみるうちに夏季プログラムの企画が始まり、多くの学生が被災地に派遣されました。そのスピードとスケールに驚くとともに、一種の興奮を感じたのを今でも覚えています。2年目以降は被災地の状況変化に伴い、私たちの活動も困難を極めました。時には学生スタッフ同士で口論もし、なんとか企画を進めることができました。

3年次では、気仙沼市での活動に携わりました。活動では現地の方々にご迷惑をおかけすることも多々ありました。しかし、東京に帰るときはいつも「また気仙沼においでね」と笑顔で見送ってくださるのです。その姿に、逆にこちらが元気づけられ、学ぶものがありました。そして、何度も気仙沼に行きたいと思うようになりました。

「ボランティアは、相手に与えるもの。」以前漠然と抱えていた、こういった偏見は見事に覆されました。私たちのやる気の源は、いつでも相手の「笑顔」でした。活動が渋谷区・海外に広がった今でもそれは変わらず、メンバーの心の中にもあると思います。

活動にあたっては、教職員の方々をはじめ、他団体の方々、被災地の方々、先輩方、多くの方々に大変お世話になりました。

学生生活で半分以上の時間を費やしたこのボラステで、メンバーに恵まれながら、いろんな活動に参加したくさんの人とお会いできたことは、これからの私の人生で一番の財産になると思います。今まで本当にありがとうございました。

国際政治経済学部国際コミュニケーション学科4年 田丸佐季

ボランティア・ステーション国際部での4年間は、夢という言葉抜きに私は語ることができません。夢を見て、夢を語り、夢を追いかけて、夢のような時間を仲間たちと過ごしました。

国際協力に携わることは私の将来の夢でした。このことを、高校時代誰にも打ち明けたことはありません。しかし、大学に入学して初めての友達と尊敬できる先生と夢を語ったこと、それがボランティア・ステーションの全てのきっかけだったと思います。

しかし、夢を实践することはとても難しいものでした。ネパールでのゴミ問題に関わる活動はいつも自分たちの無力を感じました。現地の同年代の学生の意識さえ変えられない。現実には直面しました。国はその国民にしか変えられない、外部の人間が手を加えることはできません。国際協力やボランティアというものの限界を1、2年生の時に学びました。世界はそう簡単には変えられないのでした。

ただ、それでも私を動かし続けた言葉があります。

“Even if there is a small change, it makes a big difference to the society.”

これは仲間の一人がネパールでのプレゼンでアドリブで話した言葉です。少しずつの変化がいつか必ず世界を変える。この言葉を信じ、私は活動を続けることができました。

フィリピンでの活動は、島という小さな社会の未来を見ました。子ども達とたくさん遊び、笑い、学び、教える活動でした。この時も何かを変えられたという実感はありません。しかし、本来情熱が伝搬しにくいフィリピンで、島の多くの小学校が一丸となりソーラン節大会が成功したこと。私にとっては鳥肌の立つような体験でした。社会が確かに動き出すのを感じることができました。

世界はきっと変えられる。それを信じ、私はこれから国の発展を助ける仕事に就きます。

4年間、夢のようでした。ありがとうございました。

経営学部経営学科4年 徳永安恵奈

平成 23 年 3 月 11 日、東日本大震災は起こりました。被災地となった東北はもちろん、私たちの住む大都市・東京までもがパニックとなりました。

東京が落ち着いた頃、現地の報道を目の当たりにし、私たち学生に出来ることはないのだろうか、気持ちが逸ったのを今でも覚えています。学生の中には、時間を持て余しているという人が見られ、私もその一人でした。そんなとき「何か力になりたい」という願いを叶えられる場所だったのが青山学院大学ボランティア・ステーション（以下、AGU-VS）です。

活動では、被災地での復興支援をはじめ、被災地の今を届けるという使命、また都内における防災意識を高めようと努めてきました。この経験は私自身の災害に対する考え方を改めさせていただきだけでなく、学生同士の連携で得られる力強さ、地域との結び付きの大切さまでも学ぶことが出来たと思っています。「現状を良くしていくためにどのような点が改善点か」と、学生だけで議論を重ねられる環境がここにはありました。現地での支援活動で発信することの重要性を再認識し、議論の場をもってさらに深められたと感じます。

「地域に貢献する」という AGU-VS での活動経験は 4 月から始まる社会人生活でも糧にしていきたいです。予想もつかないこれからではありますが、学生生活で培ったノウハウは他の人に無い強みだと自信を持って、社会への一歩を踏み出したいと思います。

今後、AGU-VS は「震災の風化」という最大の課題を克服しなければいけません。そのためには、被災地がいかに深刻かということではなく、学生の力で地域の可能性をいかに引き出せるかという点で広報し続けることが求められるのではないのでしょうか。これからの AGU-VS の益々の発展を期待すると同時に、私自身飛躍の年としたいです。

文学部日本文学科 4 年 星川兎太郎

【「出会い、繋がり」】

私が初めて東北石巻を訪れたのは震災から 1 年が経とうとしている冬でした。凍えるような寒さで、語り部さんのお話を聞きながら震災当時の辛さを身に染みて感じました。

だけれども、見ず知らずの学生である私達に気さくに話しかけてくれる街の人々、むしろ、初対面なのに夕食に誘ってくれ、初めは驚きました。でも、本当に温かい場所だと感じました。

また、その温かい場所に私達と同じように何かできることはないかと訪れる人達との出会いも多くありました。街のコンサルタント、写真家、美大生、それぞれの形で街の活気を取り戻そうとする姿が印象的でした。

では、一学生である私に何ができるのか。それは東北の方達と繋がり続けること、忘れないこと、笑顔でいること、そのことにより東北の方達の原動力になることだと思いました。

そのために、なかなか東北を訪れることができずにいる学生を連れていき、現地を回り現状を知ってもらい、現地の人に触れ温かさを知ってもらい、美味しい食、魅力を伝えるスタディ・ツアーを開催しました。その参加者の中には、新たにボランティア活動を始めたり、東北を訪れるようになったりと、誰かの行動のきっかけを作ることができ、嬉しかったです。

とは言え、それを実現するのは難しいこと。思うように企画が進まず、悩んだこともたくさんありました。それでも諦めずに一緒に頑張れる仲間がいたからこそ、ここまで続けて来られたように思います。

だから、この 2 年間は、素敵な仲間にも恵まれたと思います。何も分からない私を引っ張って下さった先輩方、本気でぶつかり合い、協力し合うことができる同期、そして、しっかりとついて来てくれた後輩。本当に居心地の良い空間でした。

これだけの多くの繋がりにも恵まれた 2 年間に感謝し、これからもその繋がりを大切にしていきたいと思います。今まで本当にありがとうございました！

経済学部経済学科 4 年 山下友理恵

私は大学二年の春、ボランティア・ステーションに入りました。この二年間様々なボランティアに参加し、たくさんのことを考えさせられ、またたくさんのお会いがありました。多賀城では震災直後の現地の様子を見て、震災の恐ろしさ、また子ども達の強さ、繊細さを知りました。それと同時に自分の無力さも知り、自分は東北の人々の為に何が出来るのかを考えました。子ども福島ボランティアでは子どもたちの人懐っこさに逆に励まされました。わずか一日という時間でしたが、子ども達が帰る際に「楽しかった、ありがとう」など言ってくれて、うれしく思いました。また、子ども福島ボランティアでは他団体との連携役も務めました。連絡を取り合い、プロジェクトを成功させることの喜びも感じました。三年、四年の夏は塩竈でのボランティアに携わり、三年生の時は三週間のコーディネーターも務めさせていただきました。塩竈や、浦戸諸島の方と予定を考えたり、プロジェクトを進めたりする役目をしました。本当に自分たちが行っていることは人々の為になっているのか、という自問自答があり、メンバーともたくさん話し合いをしました。また、私がみんなをまとめることが出来るのかという不安もありましたが、現地の方、参加者、スタッフの支えがあったからこそ三週間無事遂行することが出来ました。現地の方から、「来てくれて本当にありがとう」「また来てください」という言葉や、参加者から「このボランティアに参加してよかった」などの声を聞くことが出来本当にうれしかったです。また四年生の夏に浦戸諸島へ行った際に島民の方から、「社会人になったら、たくさん辛いこともあるかもしれない。だけど俺はいつでも真奈ちゃんの見方だから、いつでも帰ってこい。」と言われたり、涙目になりながら握手したりして下さったことが今でも忘れられません。本当にこのボランティアをやってよかったと心の底から思いました。私は今後も復興のボランティアに関わっていきたいです。また、これからも少しずつ復興していく様子を自分の目で見ていきたいと思います。

国際政治経済学部国際コミュニケーション学科4年 菅原真奈

編集後記

最後までお読みいただきありがとうございます。本年度も多くの皆様の御蔭を持ちまして、私達 AGU-VS の活動を行うことができたと感じております。本当にありがとうございます。

さて、2011 年の東日本大震災を契機に設立された弊社団体ですが、本原稿を作成段階で 2 年と 10 カ月の月日が過ぎ去りました。東北では復旧から復興に向けて“明るく”“喜び”に満ちるところがある一方で、いまだに元の生活を取り戻すことができず、仮設暮らしを余儀なくされている方、いまなお震災の後遺症に悩み、その傷を背負っている方と様々な姿を私たちは見てきました。

メディアでは、東北の様子を特に気に掛けることもなりつつある昨今、震災復興支援“ブーム”により、多くの人々は周囲の環境に振り回されてきました。東北といえば震災とボランティア、風評被害といった画一的な見方が広まる一方で、地域ごとに復興の度合いや求めているものや課題も変わってきます。ボランティアは一過性の自己満足ではなく、継続的な活動を行うことで互いに信頼しあうことで成り立つものでもあります。

そのような中、震災を契機にボランティアに携わるようになった多くの大学生、団体では“代替わり”が行われています。所謂“震災第一世代”からのシフトです。多くの団体で、震災直後の現地の様子を知る学生が次の世代へバトンタッチしているという事実が示すように、“メンタル”という面でも、学生ボランティアは岐路に立たされています。

幸いなことに、AGU-VS という名でボランティアをしたいという青学生とともに継続的な活動が出来る私達は、社会のどこかで架け橋となっているでしょう。AGU-VS の活動が社会で認知されるにはまだまだ時間が必要です。これから社会へと羽ばたいてゆく先輩方の“想い”というものの重さをしっかりと受け止めながら、活動で得た経験を社会で奉仕し還元できるように、今後の活動に精進していきたいと存じます。これからも、どうか私達 AGU-VS の活動へ御力添えいただけましたら幸いです。

東北部・広報課 2 年 岩村洋介

青山学院大学ボランティア・ステーション 2013 年度報告書

2014 年 2 月 1 日発行

編集：青山学院大学ボランティア・ステーション広報課

発行：青山学院大学ボランティア・ステーション

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25 青山学院大学内 11 号館 1163 教室

電話：03-3409-7831(内線 12063)

印刷：株式会社帆風 VMS 青山店